

校区のあゆみ

下条

豊橋校区史

12

Gejyo







豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 下 条





平成15年台風10号による大洪水



豊橋市上下水道局下条取水場



大江川のせき止めによる田への給水



藤ヶ池の祭り風景

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます。ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
下条校区総代会長

松 井 和 久

このたび、豊橋市制100周年を迎えるにあたり、豊橋100祭記念イベントの一環として、地域の歴史や文化などを再発見し、次世代に継承するために、市内全小学校校区ごと、校区史を発行することとなりました。

私たち下条校区には先人たちが残した貴重な文化財・記念碑が数多くあります。このような歴史ある下条の姿を後世に伝えるとともに、ふるさと下条を愛する心の糧となればと思ひ編集いたしました。

校区史の編集にあたり、中村功氏、村上逸郎氏（郷土史研究家）をはじめ、校区史編集スタッフの方々には、大変お世話になりましたことを、紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

なお、下条校区史は、下条校区全家庭に配布することになっておりますので、それぞれの家庭で活用されて、下条校区の良さを再認識していただければ幸いです。

目次

CONTENTS

第1章 自然と環境

- 1 位置・自然 7
- 2 土地のようす 7
- 3 気候のようす 8
- 4 交通のようす 9

第2章 歴史と生活

- 1 下条のあゆみ 10
 - (1) 原始時代 10
 - (2) 古代から中世 10
 - (3) 近世（江戸時代） 13
 - (4) 近代（明治～昭和） 15
 - (5) 豊橋空襲と豊川海軍工廠 15
 - (6) 下条音頭 16
 - (7) 下条町内の戸数と人口の動向 16
- 2 産業 19
 - (1) 下条の施設園芸 19
 - (2) 下条校区が誇る水道水の水源 21
- 3 校区の活動 22
 - (1) 校区総代会 22
 - (2) 校区市民館活動 22
 - (3) 成人式 22
 - (4) 敬老会 23
 - (5) 体育活動 23
 - (6) 校区盆踊り大会 23
 - (7) 校区一斉530運動 23
 - (8) 校区一斉防災訓練 24
 - (9) 青少年健全育成活動 24

第3章 教育と文化

- 1 学校教育・保育教育 25

- (1) 小学校のあゆみ 25
- (2) 「下条小学校創立百周年」を
記念しての座談会より 26
- (3) 保育園のあゆみ 32
- 2 文化財・史跡・記念碑等 33
 - (1) 比売天神社雨乞面 33
 - (2) 金西寺の麻地着色涅槃図 33
 - (3) 金西寺の千体仏（千体地藏尊） 33
 - (4) 藤ヶ池町素蓋鳴神社の神輿 33
 - (5) 正楽寺の御所様 34
 - (6) 牛川下川公園の忠魂碑 34
 - (7) 天王の渡船（天王の渡し） 34
 - (8) 美田満眸の碑 35
 - (9) 恵沢存水の碑 35
 - (10) 五井組報徳社 35
 - (11) 校区内の神社と寺院の起源 35
- 3 人物・昔話 39
 - (1) 人物 39
 - (2) 昔話 40
- 一付一下条校区を中心とした歴史年表 41
- 編集後記 52

校区の位置



第1章 自然と環境

1 位置・自然

私たちの校区は豊橋駅より北に5kmほどのところにあり、豊川を境に豊川市に隣接している。海拔はゼロメートルに近く、朝日を石巻山の方向に見て、清々しい朝を迎える事ができる良いところである。

そして、一級河川の豊川と神田川に囲まれたところで、弥生時代から直播稲作が始まり、お米がたくさんとれた裕福な土地柄で、それが故に、各町内（6町内）にお宮とお寺がある。このようにさほど広くはないところに多くあるのは、大変珍しい事だそうである。



石巻山から朝日の昇るところ

また、牛川洗島に霞堤がいまだ残され、その遊水池の中に立地するので、大雨による洪水の恐れを取り除くことはできない。豊川放水路の完成後は多少緩和されたが、想定外の大雨が降れば、洪水は免れない。しかし、大部分が稲作の部分（田んぼ）で1日たてば水も引いてしまい、上流からの肥沃な土壤をもたらしていた。堤が決壊した時の方が大きな被害をもたらす。平成16年に国内で発生した堤防決壊の被害を報道等で良く知っているかと思う。

最近では、ヨーロッパの国際河川のドナウ川流域のオランダ、フランス、ドイツにおいては、何千億円もの大金をかけて、遊水池を作る河川改修に取り組んでいるそうである。地球温暖化による想定外の大雨を全世界にもたらしている現在、古くは中国の治水技術の一つで、全国でも数少ない霞堤はこれからの治水事業に必要な技術なのかも知れない。

2 土地のようす

たびかさなる豊川の氾濫で川上からミネラル豊富な土壤が堆積された肥沃な洪積層で樹木、草花等も育てやすく、特に庭の木々は手入れが大変なほど成長著しく庭師泣かせなところである。そして、稲作を中心に数多くの野菜を生産し、味の良い野菜がとれることが自慢できる。特に白ネギ、なす、里芋、ゴボウは突出して美味しく、豊川用水完成後は温室団地ができ、菊葉、ミニトマト、エディブルフラワー、健康に良い紫蘇の葉が作られ、特に大葉（紫蘇の葉）はとなり校区の大村と合わせると、全国1の生産量を誇っている。このように稲作中心の農業から施設園芸が中心の近代的な農業経営に変わってきた。



大葉（紫蘇の葉）の温室

そして、となりの石巻地区と合わせて、次郎柿の産地としても知られている。温室の柿作りにおいては全国でも初めての試みで、8月下旬には収穫して東京に出荷され、かなりの高値で取引されているようだ。平成16年から、普通は4角形であるのに、時々珍しい5角形の柿ができ、合格祈願用に販売され評判になった。最近では、イチジクの栽培も盛んで、医食同然と言い健康に良い物が作られている。



温室栽培の次郎柿

また、校区の東側を大江川が流れている。川の利用方法が大変ユニークで田植え時期になると、町内6つに分かれ、上流から堀之内、竹之内、藤ヶ池、天王、八反ヶ谷、五井の順で川をせき止めそれぞれの田に引水し、水の必要がなくなるとしもての方からかいぼりが始まる。河川改修が進んだ今はなく、以前は担当の流域で、下手からせき止めをはずし、水がひいたころ、担当町内のじいさん、ばあさんから子どもを交えて、魚を手づかみで、ナマズ、ウナギ、ドジョウ、フナ、鯉等を獲った。10月頃の町内あげでのイベントで、夜にはそれらを肴に酒盛りが始まり、貴重なタンパク源の補給になった。フナは串焼きにし、麦を束ねたものにさして乾燥させ、正月の雑煮のだしを取り、新年の美味しいごちそうになった。良き思い出である。

3 気候のようす

春は桜、柿の新芽、堤にひそかに咲く野草の花の自然に恵まれた地域で、初夏には周りの稲もすくすく育ち、夏は、周りの田に水があるので気温が町中まちなかに比べると2～3度低く涼しく、夜半になれば、ひるなかに蒸発した豊川の水が冷やされ夜露となって、木々、草花等の葉にたまり、そこを吹き抜ける風は真に涼しく、クーラーの必要性を感じさせない。

秋は実り多く、ナシに始まって、イチジク、柿、栗が非常に美味しくやせる暇もない位良く食する。



イチジクの栽培

そして、稲も黄金色に輝きはじめる。農業集落排水のおかげで、生活污水が田に入らなくなり、美味しいお米が取れるようになった。また、ハエ、蚊も少なくなり過ごしやすくなった。



稲作（秋の実りの時期）

ただし、台風が来ると大変で、収穫も半減、洪水の心配もしなくてはならない。しかし、楽しみもある。それは豊川の濁流を避ける魚たちが遊水池に避難してくる。大江川、屋敷まわりの排水溝までくる。大雨の後には大きなタモ網を持って見回りにいく。時には1m近い真鯉も捕まえることがある。我が家の前にある田の水たまりに大きな鯉がパチャパチャ音をたててはねているのを見たことがある。

冬は、伊吹おろしではないが、本宮山から吹き下ろす風が強く、風力発電を一つ作れば校区内の電気は全部まかなえるのではないかと、常々思う。しかし、水分の多い土地柄で、そこ冷えがする。

4 交通のようす

新幹線の駅と東名高速の豊川インターの中間点に位置し、東には三ヶ日インターまで、20分くらいでいける交通の便の良いところである。江戸時代には、豊川を利用した物資の運送が盛んで、新城方面から吉田湊、前芝湊まで荷物を運び、帰りは当古の船宿に一泊して新城まで戻る船路があった。そして、当古は船宿として大変栄え、姫街道の渡し場としてにぎわっていた。その姫街道は我が校区の北を通っている。嵩山、石巻、下条を通り、豊川を渡って当古を経て、国府まで、新居の関所をさけての街道であった。東海道の脇街道として当時はかなりのにぎわいで、色々な情報をもたらしたのではないかと思われる。それが故に、この地域には、文化人、知識人を多く輩出している。

そして、下条を通過する公共交通機関は、明治40年に初めて定期馬車が運行され、豊橋～富岡間で大正末期まで多くのお客が利用した。昭和に入り馬車から自動車に変わり、三ヶ日～豊橋間の運行も増便され、とても便利

になった。昭和7年には、豊橋～賀茂間の定期バスの運行も始まり、さらに便利になった。しかし、昭和の後半20年代頃から、自動車も進化を遂げ、低価格な車も開発され、一軒に1台所有されるようになり、昭和50年代にはひとり1台の時代が平成には、さらに進化をとげ複数台を所有するようになった。

そのために、定期バスの利用者が著しく減少し定期バス路線が赤字を理由に廃止され、お年寄りや子ども達のような交通弱者にとっては不都合な地域になってしまった。

第2章 歴史と生活

1 下条のおゆみ

(1) 原始時代

先土器～縄文～弥生～古墳時代 下条周辺においては、先土器時代の西暦前十万年頃、初の古人類といわれる牛川原人が発見され、縄文時代に入ると、周辺で高山蛇穴遺跡や石塚貝塚を始めとする遺跡・貝塚が多く発見されている。この地域では、縄文時代の遺物・遺跡は発見されていないが、白石台地は、森林地帯での狩猟や沖積低地水辺地帯の漁労など、人々の食料採集の適地で、重要な生活領域であったと思われる。

弥生時代になると、石巻山や本宮山にある岩倉が信仰の対象となり、山そのものに畏敬の念をもつ氏族神崇拜の時代へとなってゆく。この頃は、下条周辺一帯の文化のあけぼのの時期で、白石台地では、縄文式伝統の影響をよく受けた弥生式土器が数多く出土している。このことから、ここは自然に恵まれた台地で、人々は狩猟や漁労の生活をしながら、湖沼の緑地や湿地に水田の開発をすすめ、直播の稲作農業を始めたことがうかがえる。こうして、下条地域の稲作の中心地となる基が開かれ、人々は定住して小集落を営むようになった。弥生後期になると、湿地帯の乾きにつれて、竹之内、堀之内集落がはじまり、西辺の豊川の流れに沿った自然堤防洲にも、八反ヶ谷、大師（藤ヶ池）、暮川の集落ができていった。

この時代の遺跡に、台地で下条田面を臨み、遠賀川式土器が出土した白石遺跡や住居跡、

方形周溝墓、紡錘車などが発見された高井遺跡があり、周辺には瓜郷遺跡がある。

やがて古墳時代に入ってゆくが、弥生末期になると白石一帯の弥生文化は、低地への進出を始める。水田が見下ろせる谷口付近の高台に、支配的地位の氏の長者の住居が定められ、土地と部民を私有する支配者が権力によって部民の労力を結集し、貯水池を造ったり、排水路を引いたりして、盛んに水田を開いていった。氏の長者の支配のもとで、下条地域は稲作中心の農村として、ますます開発されていった。この支配者の住居地には、その権威の象徴として、高塚墳墓、谷口古墳が造られている。

他に、この時代の遺跡として、豊橋地方最古の浪の上遺跡や大師古墳がある。



白石遺跡の土器

(2) 古代から中世

古代：奈良～平安時代 大宝元年(701)に大宝律令が施行され、三河の国(西三河)と穂の国がひとつになり、三河の国ができた。三河の国の下に“郡”を、その下に“郷”が置かれた。八名郡は、多米、美和、和田、

養父（現在の金沢、賀茂）、八名、服部、美夫の七つの郷で構成されていた。下条周辺には、美和（石巻山付近）と和田があって、下条の人々は和田に属していたと思われる。

国は、この律令施行により、「条里制」（国が農民に田を支給し耕作させ、死ぬと没収する口分田制度）を実施した。各地の地名に、「上条」、「中条」、「下条」を見かけるが、それぞれを「じょうじょう」、「ちゅうじょう」、「げじょう」と読むのは、とても古い読み方で、条里制と関連が深いと言われている。現在では、耕地整理のため消滅してしまっただが、かつては、下条にも条里制の遺構がみられた。このことから、下条という名は、五井、八反ヶ谷、天王、藤ヶ池、竹之内、堀之内などより遙に古くから存在していた地名と考えられる。

この時代に、竹内王子（皇子）の下条伝説が始まり、文武天皇にまつわる一連の伝説が鳳来寺、三明寺、砥鹿神社、石巻神社など、この地方の著名な古社寺の縁起として広く流布している。また、文武天皇石巻説がさらに下条と関わりをもち、この時代の下条を舞台としていたことから、石巻山信仰を背景にした出雲族（美和族）の勢力が、豊かな水田を持つ下条地帯へ進出したといわれている。そして、竹之内の土器畑一帯にみられるおびただしい数の土師器（弥生式土器と同じ赤焼き素焼土器）の破片の出土状況から平安初・中期の頃の村の姿を見ることができる。

初期の稲作は、直播法であったが、この時代に入ると、ようやく田植農法が始まった。堀之内、竹之内では、田の祭祀の権限を持つ支配者による田植始めの祭りが盛んに行われ、安定した古代農村の下条村の様子がうかがえる。豊かな水田を有することにより、原始的な共同体制の村組織は長く続き、順調な発展をしていった。

平安時代になり、延喜2年（902）、これま

での条里制が廃止され、公地ではなく私地となった田（莊園）が現れるようになった。下条には、莊園や大きな力を持った長者の出現はなかったが、小規模の村があちこちに存在し、現在の竹之内、堀之内に力を持つ者が誕生し、それらの集落の中心となっていたようである。また、下条の人々も公地の私有化に努力し、嵐や洪水で荒蕪地になった田を開墾し直していたと思われる。そして、石巻山が美しく見える御所ヶ池に揺拝所（比売天神社）が建立され、春には、石巻山の神を迎え（サオリ）、神田で御神米をつくり、秋には、神を山に送る（サナブリ）などの神事が行われ、神への信仰のなかで暮らしていたようである。

※下条田面の最南端にあった折目に、祭用の米を栽培する「折目田」があった。

石巻山の信仰から山上社・里宮という石巻神社が誕生した。延長5年（927）の「延喜式」に三河の国の神社26社が載っているが、八名郡では石巻神社1社のみである。当時の石巻神社が、いかに大きな神社として、広く信仰を集めていたことがわかる。

今でも、石巻神社の山上社では、年の初めに農作物の作況を占う管粥祭が行われ、古の名残をみることができる。この占いは、全国でも、最も古い年占いの形を継承しているといわれる。

麻	稗	小豆	大豆	晩粟	早粟	晩稲	中手	早稲	小麦	大麦	石巻山管粥記
中	下	下	中	大	下	下	大	大	中	大	

戊寅 十五日	旧	惣管	蕎麦	胡麻	芋子	黍	大根	大角豆
	一月	中	下	中	中	大	大	中

管粥祭の占いの結果

※現在の堀之内町の比売天神社は、石巻神

社の末社といわれる古社で、一時期には下条の総社であった。

中世：鎌倉～南北朝～戦国～安土・桃山時代

鎌倉時代の下条に関する史料はないが、隣接の賀茂は、寛治年間（11世紀末）に京都の賀茂神社を領家（公地の寄進先）とする小野田庄という荘園になった。

鎌倉時代の地方を特徴づけるのは、文治元年（1185）の守護と地頭の設置である。初代の三河守護は安達盛長だったが、鎌倉に残ったために守護代の善耀が派遣された。荘園には地頭が派遣されていたが、守護・地頭と領家との対立が起きるようになり、鎌倉前期では、その力関係は領家が強かった。そのため、地頭停止や守護代の訴訟が起きたが、承久3年（1221）の承久の乱以降、守護の力が強くなった。こうして、荘園領家の力はしだいに弱くなり、農民は、土豪と呼ばれる武士の下にまとめられていった。

下条においても、荘園となっている土地が名目上は領家を戴いているものの、後の星野氏（星野勘左衛門行明）や竹内氏（竹内右衛門太夫義鎮）ら下条に住む有力者が支配するようになった。星野氏は、熱田大宮司家の出身で、大江氏、毛利氏が本姓と考えられている。鎌倉時代末期から、星野庄（下条西町・行明・大村辺りに比定）の実質の支配者である星野庄の領家は、北野社松梅院であった。

暦応元年（1338）、足利尊氏が征夷大將軍に即位し、南北朝時代となるが、星野氏は、幕府の三河奉公衆に属し、一番奉公衆として行動していた。延文5年（1360）、西郷氏の矢作で起こした、新三河守護の大嶋氏の三河入り阻止事件では、先の三河守護の仁木氏ではなく、大嶋氏側について西郷氏と吉良氏（西郷氏と親戚）と戦い、大嶋氏の三河入りを助けている。守護代を務めた西郷氏を破るほどの力を持っていることから、星野勘左衛門行明

が、いかに大きな勢力の武士であったかがわかる。彼は、星野（現在の下条）に居住していたが、洪水で屋敷を流され行明へ移り住み、天王の渡しや行明の渡しを開いている。

竹内氏は橘姓で、竹内右衛門太夫義鎮は、財賀寺に大般若経を納めている。応永11年（1404）には藤ヶ池の大師に住居を構えていたが、後の洪水により竹之内に移住した。比売天神社の棟札によると、延徳元年（1489）の橘弘重から天正14年（1586）の竹内権太郎、竹内孫三郎までの約100年間に、比売天神社の本殿から鳥居まで建立している。当時、比売天神社が下条の総社であったことを考えると、この時期の竹内氏一族は、最も権力があり下条を支配していたことがわかる。慶長4年（1599）からは中村氏が竹内氏から、その権力を継ぐことになってゆく。

※竹内氏の娘が中村氏に嫁ぎ、男（6名）

は、下条から徳川家康とその家臣たちの譜代大名に仕官したことから、中村氏が後継者になったとされている。

戦国時代の東三河は、奥三河に奥平氏と菅沼氏、西郷・嵩山に西郷氏が勢力を張り、豊橋は、渥美から勢力を延ばしてきた戸田氏と豊川から勢力を延ばしてきた牧野氏が衝突する場となっていた。しかし、いづれも本家が今川氏に討たれたために、今川義元の時代には設楽郡を除き、その支配下に入った。桶狭間の戦いで今川義元が没すると、徳川家康につく者が多くなり、豊橋では、家康が吉田城を攻略し、酒井忠次が城主の座についた。やがて、武田信玄が戦死、奥平、菅沼両氏側の多くも徳川方に加わり長篠の戦いに勝利したことで、東三河は、徳川の領国となった。

一方、戦国時代の下条では、一時期に白井氏、下条氏、菅沼氏らが居住していたものの全体的な支配権は、竹内氏が握っていた。この頃も、石巻神社の祭礼が続いて行われてい

たことからみて、戦場として土地が荒れることもなく、比較的平和な生活が続いていたようである。この平穏な時期に、後の竹之内、堀之内、藤ヶ池、五井、天王、八反ヶ谷、暮川、犬之子の八村の基が築かれた。

文化の発展や生活の恵みとなってきた母なる豊川は、過去幾度となく大きな氾濫を起こし、その流路をたびたび変えた。下条周辺が、現在の流れに落ち着いたのは、1500年頃と考えられ、それ以降は、上流地区で流路が変わる程度となった。また、この時代には、下条とその周辺において大変重要な事業が行われている。それは、吉田城主の池田輝政（1590～1600）が豊川の洪水から吉田の町を守るために、霞堤（かすみでい 鎧堤）の築造を開始したことである。この霞堤（鎧堤）は、豊富な水流をもつ豊川の上流から下流まで、切れ目のない一本の堤防にしないで、右・左岸の切れやすい箇所は開けたままにしておき、大雨の際には、その開口部から流れを逃がして下流の町への浸水を防ぐという仕組みであった。このため、霞堤（鎧堤）のある地区は、大雨の時には遊水池となるので甚大な被害を被り、農民や地域住民が犠牲にされてきた。

この霞堤（鎧堤）は、豊川左岸では下条、賀茂、沖野、金沢の四ヶ所に、右岸では大村、当古、三上、二葉、東上の五ヶ所に築造された。全国でも珍しい築堤法で、中国地方にもう一ヶ所あるだけといわれ、豊川については、吉田城主・小笠原氏（1645～1697）の頃に完成した。

現在では、1963年に豊川放水路が完成したことで、右岸側の五ヶ所がすでに締め切られており、左岸の沖野堤は、近年に締め切られる計画となっている。残る三堤（下条、賀茂、金沢）については、小堤を設置することで、中小規模の洪水による浸水被害の軽減を図るにとどまる計画となっている。

(3) 近世（江戸時代）

江戸幕府初期の下条の部落は、竹之内、堀之内、藤ヶ池、五井、天王、八反ヶ谷、暮川、犬之子の八ヶ村であったが、1661年頃、領主の勧めにより竹之内の中村善太夫が開発した白石新田が加わって九ヶ村となった。

江戸時代の下条は吉田藩に属していた。その頃の百姓農民は、油を絞るように搾り取られたうえ、毎年のように襲ってくる洪水に苦しんでいた。幕末維新にかけては、徳川家の譜代であったため、重税に耐えかねて、富農はことごとく没落していった。

なお、江戸時代における下条の村々の石高と近郊の村々の石高は次のようになっていた。

下条の村々の石高

村名	寛永高附 (1624~1643)	元禄郷帳 (1688~1703)	享保10年(1725)助郷帳 (吉田宿・二川宿)		天保郷帳 (1830~1843)
			村高	助郷高	
五井	386石	327石	445石	327石(吉田)	397石
八反ヶ谷	299石	253石	315石	253石(吉田)	271石
天王	357石	313石	375石	375石(二川)	375石
藤ヶ池	694石	612石	藤ヶ池は助郷の指定を受けてないため記帳なし		676石
竹之内	454石	413石	448石	448石(二川)	448石
堀之内	258石	234石	261石	261石(二川)	261石
暮川	206石	205石	261石	205石(吉田)	249石
犬之子	232石	212石	251石	108石(吉田)	247石
6ヶ村合計 暮川、犬之子除く	2,448石	2,152石	5ヶ村合計 1,844石	5ヶ村合計 1,664石	2,428石
8ヶ村合計	2,886石	2,569石	7ヶ村合計 2,356石	7ヶ村合計 1,977石	2,924石

*竹之内には白石新田の25石を含む

*村高：田畑を検地した土地に応じて上中下の位に分け、石盛を極め、田畑屋敷夫々の高を寄せ合わせた石高を言う。

*助郷高：近世(江戸時代)の宿駅が常備人馬を負担しきれぬ大通行の時、補助的に人馬を提供する助人馬出役の基となる石高を言う。

*二川宿と吉田宿とでは村高と助郷高に差があり、二川宿の比率が高いのは宿屋の伝馬能力が吉田宿の方が高くて、二川宿は貧乏宿場であったと考えられる。

また、犬之子等は洪水多発地帯という事で、助郷高を低くしてもらっていたと思われる。

なのに、下条の村々はこれらの村と同じくらい低くならなかったのか、考えられるのは、洪水が起らない年はこの村高よりかなり高い収穫がある村であったか、これらの村より洪水被害の少ない村であったか、どちらかであったと思われる。

享保10年(1725)の助郷帳からの近郊村高：吉田宿

大村	行明村	長瀬村	大蚊里村	仁連木村
2,135石	702石	298石	234石	1,882石

享保10年(1725)の助郷帳からの近郊村高：二川宿

牛川村	浪の上村	金田村	神郷村	神ヶ谷村	多米村
889石	222石	574石	442石	263石	692石
加茂村	吉田方村	牟呂村			
2,013石	2,681石	1,929石			

(4) 近代 (明治～昭和)

明治時代 吉田藩は、明治4年(1871)11月の廃藩置県はいはんちけんによって額田県となり、翌年には愛知県となって、今日に至っている。明治5年(1872)頃の下条は、竹之内、堀之内、藤ヶ池、五井、天王、八反ヶ谷、暮川、犬之子、白石新田の九ヶ村から成っていた。明治9年(1876)に、それまでの竹之内、堀之内、藤ヶ池、白石新田を東下条村に、五井、天王、八反ヶ谷、暮川を西下条村とする合村願いを申請した。申請は、明治11年(1878)許可され、それぞれ統合して新村となった。犬之子村は、そのまま残るものの、明治22年(1889)に町村制が実施され、同年10月には、東下条、西下条、犬之子が合併して下条村となった。

下条村は、米、麦、養蚕を中心とする農村で、生活はあまり楽ではなかった。しかし、明治29年(1896)頃から、下条の先覚者たちが養蚕に着目し、積極的に取り組んだ。やがて、養蚕業が盛んになり、東三河の本場と称されるようになった。

明治38年(1905)に、県が町村分合の訓令を発し、翌年9月、下条村と牛川村が合併して、下川村が誕生した。明治43年(1910)、下川村と石巻村が総合耕地整理組合を設立して始めた耕地整理事業は、翌年に起工、大正4年(1915)に竣工した。この結果、旱害かんがいが減少して農作物の収穫向上が図られるようになると、道路は、車道、支道が適当な間隔で開通した。農家と耕地や他村との連絡も取り易くなり、交通運搬の便など直接的間接的に受ける利益は甚大であった。

大正～昭和時代 下川村・石巻村総合耕地整理事業の竣工に続き、大正7年(1918)から始まった西下条耕地整理が終わると、下条全域で農作物の収穫向上が見込めるようになった。また、大正8年(1919)には、各地に電気施設の設置が進み、下条にも電燈がつき、

ランプ生活から解放された。

大正末期から昭和初期にかけて、未曾有の不景気が全国を襲う。農産物の暴落により農家の収入は激減し、農村の生活は愈々いよいよ苦しくなっていく。工業界では、事業の頓挫による会社倒産、工場閉鎖、失業者の増加など経済界に大恐慌が起こり、世の中を包み込んでいったのである。

昭和7年(1932)8月15日、下川村は豊橋市と合併し、八名郡下川村から豊橋市になった。この合併に伴って暮川は牛川町へ編入され、下条区域は、下条西町、下条東町、院之子町と町名を改称したが、院之子町は、翌8年(1933)に、豊川町へ編入された。

国内を見ると、昭和16年(1941)に突入した第二次世界大戦に敗北した日本は、昭和20年8月15日、ポツダム宣言を受諾(無条件降伏)して、終戦を迎えた。これに伴い、マッカーサー米将軍が連合軍司令官として進駐し、軍国日本の解体に着手、財閥の解体や農地解放、婦人参政権、労働組合の発足などの民主化を進めていった。

下条の農家においては、昭和23年(1948)に制定された農業協同組合法により、それまでの豊橋市農業会の5支所を統合し、東部農業協同組合を設立、相互扶助による新しい農業経営へ力強い歩みを進めていた。また、昭和39年(1964)から昭和41年(1966)にかけて完成した農業構造改善土地基盤整備事業(畑耕地整理)では、豊川用水を畑に導水した温室団地の建設など、下条の農業経営の近代化が図られた。加えて、日々進歩する技術を駆使した農業用機械を積極的に導入(農業の機械化)することで、今日の近代的農業経営が確立されたのである。

(5) 豊橋空襲と豊川海軍工廠こうしよ

昭和19年(1944)サイパン島が米軍に占拠

されて以来、日本国内への空襲が本格化し始めた。翌年3月の東京大空襲を始め、大阪、名古屋、各地の中小都市などが焼夷弾による攻撃を受け33万人にのぼる市民が戦火の犠牲者となった。

豊橋市は昭和20年（1945）6月19日前日の浜松に次いで空襲を受けた。

19日の深夜から20日の未明にかけて約3時間、米軍機B29、延べ90機による波状攻撃を受け、市街地の9割が罹災した。全焼、全壊家屋1万6千戸、死亡者1千名余りを出し市街地の7割は一面焼け野原となった。

豊川海軍工廠は、昭和14年（1939）12月海軍の機銃と弾丸を製造する兵器工場として宝飯郡豊川町、牛久保町、八幡村（昭和18年豊川市となる）に建設開廠し多数の従業員を集め、それまで豊川稲荷の門前町であった豊川がにわかに工業都市へと脱皮した。

昭和18年（1943）学徒戦時動員体制確立要綱が決定され、翌年昭和19年愛知県でも学徒動員が実施された。

これにより、全国の大学、専門学校の学生を始め、東三河地方の中学校、女学校、さらに国民学校高等科の生徒が軍需工場に動員され豊川海軍工廠には5千4百の学徒動員が行われ、工廠従業員は5万名を超えた。

昭和20年（1945）8月7日に爆撃を受け施設の破壊はもちろん、工員動員学徒の爆死者2,423名（動員学徒は452名）を出し壊滅した。この爆撃の前後に、広島、長崎に原爆が投下され、ポツダム宣言の受諾により太平洋戦争は終結した。

下条校区では、この大戦で70名余（内豊川海軍工廠では5名）の尊い命が戦火で散った。

現在の私たちの暮らしがこの尊い犠牲のうえになりたっていることは忘れることは出来ません。

(6) 下条音頭

藤ヶ池町の松井庄蔵氏により下条音頭が作られ、一時期校区に踊りと共に普及したが、現在では音頭・踊り共に忘れられている状況である。

今回の校区史編集を機に、昔を呼び起こし校区が、活性化されることを期待している。

下条音頭は次の通りである。

げじょうおんど
下条音頭

まついしょうぞう
松井庄蔵 作詞

- 1、 村はなあー
きりり豊川 きらきら波に
月がくだけて 本宮山から ほうい
流れいかだで おいでん おいでん
下条音頭を流して おどろ
そうだ そうだ そうだ そうだのん
- 2、 村はなあー
きりり水利で田んぼも開け
おこしゃ黒土 米どころ ほうい
俵かついで おいでん おいでん
下条音頭の輪を つくる
そうだ そうだ そうだ そうだのん
- 3、 村はなあー
きりり東の 石巻さんに
朝日昇れば 輝く下条ほうい
ゆっくり歩いて おいでん おいでん
下条音頭で、はずんで踊ろ
そうだ そうだ そうだ そうだのん

(7) 下条町内の戸数と人口の動向

各時代における人口の動向は次表のとおりである。

安政5年(1858年)

(下条誌のためにより)

村名	戸数(戸)	人口(人)	村名	戸数(戸)	人口(人)
五井	63	269	竹之内	46	188
八反ヶ谷	26	105	堀之内	32	110
天王	58	286	暮川	38	150
藤ヶ池	85	327	犬之子	22	135
6ヶ村合計 暮川・犬之子 除く	310	1,285	8ヶ村合計	370	1,570

*竹之内には白石新田の戸数6戸人口28人を含む

明治5年(1872年)

(創立百年の歩みより)

村名	戸数(戸)	人口(人)	村名	戸数(戸)	人口(人)
五井	61	325	藤ヶ池	73	353
八反ヶ谷	29	155	竹之内	46	285
天王	67	358	堀之内	38	206
6ヶ村合計				314	1,682

*竹之内には白石新田を含む

*暮川・犬之子は不明の為除く

明治18年(1885年)

(下条誌より)

村名	戸数(戸)	人口(人)
西下条	168	1,044
東下条	160	860
犬之子	22	152
3ヶ村合計	350	2,056

*西下条は五井・八反ヶ谷・天王・暮川

*東下条は藤ヶ池・竹之内・堀之内・白石新田

昭和30年（1955年）

（市の資料より）

町名	戸数（戸）	人口（人）	村名	戸数（戸）	人口（人）
五井	51	314	藤ヶ池	53	344
八反ヶ谷	22	140	竹之内	40	244
天王	60	348	堀之内	40	273
6町合計				266	1,663

平成2年（1990年）

（国勢調査資料より）

町名	戸数（戸）	人口（人）	村名	戸数（戸）	人口（人）
五井	65	293	藤ヶ池	65	300
八反ヶ谷	28	140	竹之内	67	293
天王	64	306	堀之内	46	214
6町合計				335	1,546

平成12年（2000年）

（国勢調査資料より）

町名	戸数（戸）	人口（人）	村名	戸数（戸）	人口（人）
五井	71	282	藤ヶ池	69	302
八反ヶ谷	31	128	竹之内	76	300
天王	68	298	堀之内	53	238
6町合計				368	1,548

2 産業

(1) 下条の施設園芸

下条協業温室組合

昭和35年（1960）に高度成長政策の進展とともに、農業と工業、商業との生産性や所得の均衡をはかるものとして国の農業の方針を定めた農業基本法が制定され、農業規模の拡大、近代化を図り、生産性、所得の向上実現のため、第一次農業構造改善事業を実施し国庫補助金等により土地改良や温室等の近代化施設の整備を行うこととなった。

この農業構造改善事業は今日に至るまで、豊橋市だけでなく全国で温室団地や出荷場等の施設整備や近代化施設の建設などそれぞれの地域ごとの各種事業が総合的に実施されている。

下条協業温室組合は、第一次農業構造改善事業（昭和36～47年）の指定地区として認定され、昭和39年（1964）から41年（1966）にかけて土地改良とともに事業が実施された。昭和39年度は土地改良事業が実施され、昭和40年度（1965）は土地改良事業と下条協業温室組合の事業が実施された。下条協業温室組合の事業内容は野菜温室80棟10,912㎡、事業費5千750万円であり、下条協業温室組合としての補助金は国から5割、市より5分おりた。昭和41年度（1966）の事業は土地改良事業と下条協業温室組合の事業であり、下条協業温室組合の事業内容は野菜温室5棟682㎡、事業費328万1千円（補助金は国から5割、市より5分）、広巾散布機2台、事業費69万4千円（補助金は国から5割、市より1割）であった。

（発足当時のこと）

当初、土地改良事業と近代化事業はセットであり、土地改良事業は農業生産基盤が整備されるということで賛成が多かったのですが、

近代化事業については将来性に対する不安が大きく、ほとんどの人が反対で構造改善事業を推進するのが困難な状況にあった。そこで八反ヶ谷の山本一司さんが堀之内の松井進さんに近代化事業の内容として温室をつくることを提案し、堀之内にはかってもらうことになった。堀之内では4戸の賛成が得られ、八反ヶ谷では7戸の賛成があった。

その後天王で8戸が参加を希望し、合計19戸で下条協業温室として発足することになった。温室は一期工事として堀之内20棟、八反ヶ谷28棟、天王32棟建設され、二期工事として希望者に5棟建設された。初代組合長は松井進さんが務めることになった。温室団地の完成後、全国各地より見学者が訪れた。

昭和42年（1967）頃豊橋温室組合に下条協業温室組合として加盟した。その後昭和56年（1981）に協業温室は解散し、個人の経営に変わった。当時の作物は、冬はファーストトマト、夏はメロンでした。

下条の農業統計情報

（2000年農林業センサスによる）

○総農家数：176

販売農家数：155

内専業農家：41（26.5%）

内兼業農家：114（73.5%）

○販売農家の作物別栽培面積

10,380a

・水稲：3,155 a

・野菜（露地）：2,288 a

主な作物

ねぎ：807 a

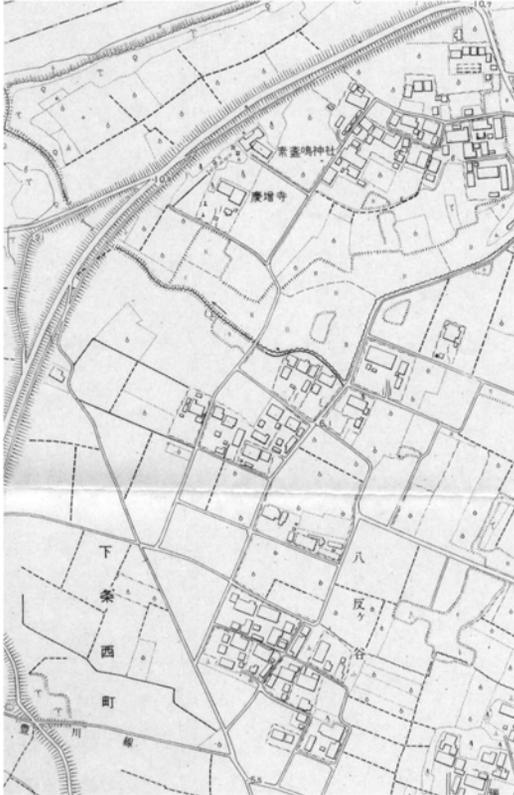
キャベツ：228 a

白菜：178 a

ほうれんそう：141 a

トマト：133 a

なす：59 a



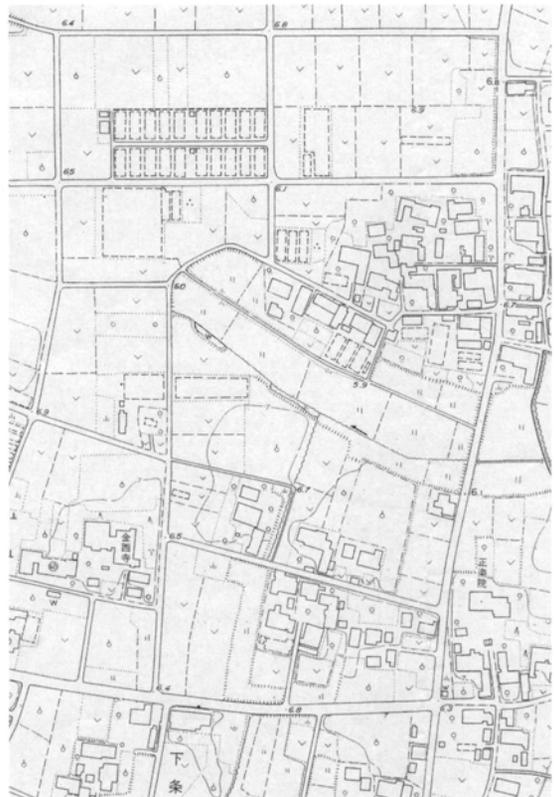
温室団地造成前 昭和37 (天王・八反ヶ谷)



温室団地造成後 昭和45 (天王・八反ヶ谷)



温室団地造成前 昭和37 (堀之内)



温室団地造成後 昭和45 (堀之内)

・果樹（露地）	: 2,641 a
主な作物	
柿	: 2,185 a
ぶどう	: 130 a
うめ	: 66 a
かんきつ類	: 24 a
温州みかん	: 20 a
・施設	: 2,089 a
主な作物	
野菜	: 1,297 a
果樹	: 119 a
花き、花木	: 116 a
・その他	: 207 a
豆類、いも類、花き・花木ほか	



昭和40年 農業構造改善事業による温室団地

(2) 下条校区が誇る水道水の水源

豊橋市の上水道の“水”は昭和5年(1930)に、その当時の豊橋市北部を還流する豊川筋上流部で現在の五井町内の下条西町字三ノ下地区の豊川本流の河底に集水埋渠を構築して取水され、下条送水場より牛川町小鷹野の浄水場へ送水し、浄化滅菌後、配水場(多米町蟬川)から市内全域に給水している。

この様に大規模で大切な“命”の水である水源が下条校区内にある。

その取水工事は昭和2年(1927)7月18日着工され、昭和5年(1930)3月29日より豊橋市民へ“命の水”として一日も休まず下条

より送水されている。

下条校区の生活用水はそんな水源であるが浄化滅菌水でないため給水されず、浅井戸水で生活するしかありませんでした。

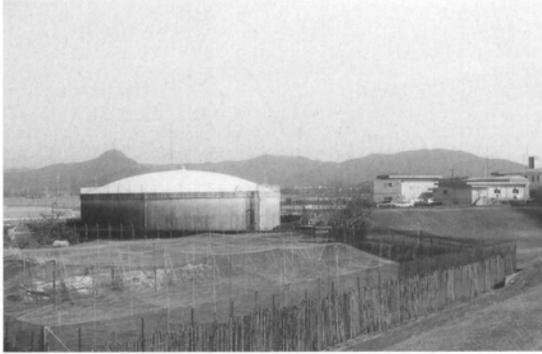
しかし、昭和30年代に入り校区民(特に婦人部)からの要望と相まって、下条地区簡易水道の建設が決まり、昭和32年(1957)1月7日から3月31日までの工期にて(550万円の予算)小学校のプール前に完成し4月1日より通水開始した。給水管の敷設工事は校区民総出による手掘りにて行われ、4月より安心して飲める水道水が校区一円に給水された。この下条地区簡易水道は、市内でも最良なる天竜川水系の地下水で、地下100mより汲み上げている。(下条地区簡易水道は昭和43年に市上下水道に吸収統合された。)

昭和47年(1972)までは下条校区民のみに給水しておりましたが、給水方法が一方向のみであるため、水の需要の高まりとともに、夕方などに水圧低下による風呂水が入らない等があり困っていた。

昭和52年(1977)に豊橋市の水道第5次拡張事業のトップを切って、下条第二給水所(現下条給水所)が計画され、この水源に下条地区内に深井戸8本を増設して“5,700t”のタンクに集め、この水の水質は安定しているところから直接下条全域に両方向給水となり、校区内全域の水圧は一定となり、安心安全な水道となった。第二給水場の余水は、水質が安定しているので浄水場を経由せずに、豊橋創造大学裏と沖野地区を通して、豊橋公園内にて多米からの水道本管に接続して豊橋市街へ供給されている。

この様に下条地区からの水が、豊橋市民水道水の30%弱を受け持っている。(昭和54年時点では市の自己水源の64%、県水受水を含めた全体水源の29%)限りある貴重な水資源がクローズアップされている今日、“生命の

根源”である“水”そして校区民及び市民の財産である水道水の源がある使命の重大地域であることを知って、清らかな土地下条でありたい。



下条第二給水所（現下条給水所）

「地域いきいき子育て促進事業」を校区市民館運営委員会が中心となって各種事業を企画・運営し、校区の活性化に寄与している。



下条校区市民館

3 校区の活動

(1) 校区総代会

下条校区総代会は西町（五井、八反ヶ谷、天王）、東町（藤ヶ池、竹之内、堀之内）の各町総代により構成され、校区の事業、物事の処理・調整等を行っている。

主な活動としては、国土交通省（関係機関含む）、愛知県東三河建設事務所、市役所等に対する各種陳情・要望活動のほか、「校区市民館の運営」「ゴミステーションの管理・運営」「敬老会の企画・運営」「戦没者合同慰霊祭」をはじめとする各種行事の企画・運営を行っている。

(2) 校区市民館活動

下条校区市民館は地域の交流並びに校区民の生涯学習の場として、昭和55年（1980）5月2日に開館された。

市民館の活動はカラオケ教室、民舞教室、津軽三味線教室等をはじめとする各種の教室が年間480回程開催されている。その他、校区文化祭、校区成人式をはじめ各種の校区行事に利用されている。また、平成17年度から

(3) 成人式

成人式は社会教育委員会の主催で下条校区市民館で行っている。従来は成人の日で開催していたが、平成16年（2004）から新成人が出席しやすい成人の日（平成12年より第2月曜日）の前日の日曜日に行うようになった。



成人式の様子

下条の成人者は小学校での生活環境から団結力と助け合いの精神が強く、成人式への出席率が大変高い状況にある。成人式は式典と懇親会の2部構成で実施し、懇親会は平成17年より新成人者と小学校の恩師とが楽しく過ごせる場となる様に配慮し、来賓者の出席は式典のみとしている。

(4) 敬老会



敬老会の様子

敬老会は平成10年（1998）より敬老の日（平成15年より第3月曜日）に満75歳以上になる人を対象に校区総代会、文化協会、婦人部の主催で下条小学校体育館で、ご長寿をお祝いする祝賀会と芸能大会を行っている。芸能大会は生バンドによる歌謡ショーをはじめ民舞、カラオケ、津軽三味線、詩吟、剣舞等が披露される。

(5) 体育活動

校区民のコミュニケーションと健康増進を図るため、小学校体育館においてソフトバレー、インディアカ等に幅広い年代層の人が参加し、夜間のひとときを楽しんでいる。毎年7月には校区行事として、男子のソフトボール大会、女子の健康体操教室を行い、校区民の意思疎通を図る様になっている。また、生涯スポーツ活動の場として青陵・東陵中学校区を中心に設立されたR Y O Zスポーツクラブで行う各種のスポーツにも多数参加している。

(6) 校区盆踊り大会

社会教育委員会の主催で、毎年8月上旬に小学校の校庭で民舞の関係者をはじめ各種団体の協力を得て校区が一体となった盆踊り大会を行い、校区民の親交を深める場となっている。



盆踊り大会の様子

平成17年（2005）7月26日～29日の4日間「子ども環境サミット2005」が豊橋、豊田両市をメイン会場にして開かれた。



子ども環境サミット参加者との交流会の様子

イベントの一つとして「日本の盆踊りを一緒に踊ろう」というコーナーが7月28日に下条小学校で外国の子どもたちや、日本の各地からのサミット参加者と共に、下条小学校の児童及び職員全員のほか、校区の有志多数が参加し、「民舞条友会」の協力を得て盛大に行われた。子どもたちは交流を通じ、友情を築く盆踊りの会となり、日本の伝統文化の一端を紹介する機会ともなり、大変有意義なものとなった。

(7) 校区一斉530運動

豊橋市は530運動発祥の地として全国的に知られ、各種のボランティア活動が展開され環境美化に努めている。

通常は春と秋の2回市内全校区で530運動を行っている。下条校区では5月上旬と10月

中旬の2回校区一斉の530運動を行って、校区内の美化と住み良い環境作りに多数の人がボランティアとして参加している。

(8) 校区一斉防災訓練

豊橋市はいつ発生してもおかしくない「東海地震」の防災対策強化地域に、また今世紀後半にも発生するといわれる「東南海・南海地震」の防災対策推進地域に指定されている。被害予測によると地震発生時には下条地域は大変大きな被害が発生するとされている。このため、「自分たちの町は自分たちで守る」ために校区並びに各町内に防災組織が結成されている。この防災組織を機能させて有事に備えるため、平成16年度より校区一斉防災訓練を行い、防火防災意識の高揚と防火防災技術の習得に努めている。



校区一斉防災訓練の様子



(9) 青少年健全育成活動

青少年の健全育成のため、総代会、保護司、民生児童委員、主任児童委員、更生保護女性会等の役員と小中学校区の青少年健全育成会が中心となり各種活動を行っている。主な活動は青少年の非行問題に取り組む市民運動、青少年健全育成のつどい、各種講演会、健全育成会での部会活動、校区内危険箇所点検調査、校区内危険箇所マップの作成をはじめとする幅広い活動をしている。

第3章 教育と文化

1 学校教育・保育教育

(1) 小学校のあゆみ

下条の教育に関する歴史は古く、明治5年(1872)の調査によると、お寺を中心に住職が師となって寺子屋を開き、教育の必要性を世間に訴えて、習字やそろばんを中心にした教育を行ってきた。この狭い地域に七ヶ所の寺子屋があったということは、いかに教育への関心が高かったかを示すものである。

村名	場所	寺子数	師匠数	沿革
堀之内	霊江寺	10人	1人	嘉永年中(1848~1853)住職会禪が開く
藤ヶ池	金西寺	40人	1人	弘化2年(1845)住職神谷普門が開く
藤ヶ池	深井九郎三郎	30人	1人	天保14年(1843)の開設なりという
五井	瑞龍寺	30人	1人	天保5年(1834)住職成瀬令賢が開く
八反ヶ谷	慶増寺	15人	1人	安政3年(1856)住職恵覚が開く
天王	江楽寺	30人	1人	天保9年(1838)住職日下寿山が開く
天王	村上清平	10人	1人	嘉永6年(1853)庄屋

下条寺子屋一覧(明治5年)

近代日本の夜明けは、まず庶民の教育の普及が第一という考えのもと、明治5年(1872)に学制が施行されたことに始まった。その後

の変遷を経て今日に至っている。これから、下条における学校の変遷をたどってみよう。

明治時代

明治5年(1872)、学制の施行にともない寺子屋が廃止され、初めて藤ヶ池の金西寺に藤ヶ池郷学校が設立された。当時の下条は、竹之内、堀之内、藤ヶ池、天王、八反ヶ谷、五井、暮川、白石新田、犬之子(現在の豊川市院之子町)の九ヶ村からなっていた。

明治6年(1873)10月、文部省から許可されて、第2大学区内愛知県管下第9番中学区内第41番小学下条学校と改称。

明治8年(1875)、就学者増加の為、天王村江楽寺に教室1、教員住宅1を新設移転。

明治10年(1877)9月、第2大学区内愛知県管下第9番中学区内第77・78番小学下条学校と改称。

明治11年(1878)、堀之内・竹之内・藤ヶ池・白石が合併して東下条、八反ヶ谷・五井・天王・暮川が合併して西下条となった。

明治12年(1879)10月、愛知県八名郡第31番小学下条学校と改称。

明治16年(1883)、愛知県八名郡第28学区公立小学下条学校と改称。

明治20年(1887)、愛知県八名郡尋常小学西下条学校と改称。

明治25年(1892)4月、現在地に移転。下条村立下条尋常小学校と改称、同年7月高等科併置の認可を得て下条尋常高等小学校と改称。同時に、暮川の生徒を牛川へ、犬之子の生徒を本校へ通学するように変更した。

明治31年(1898)、暮川の生徒が本校に戻り、

生徒数が増加。同年ご真影を奉載。

明治37年(1904)、日露戦争が勃発。文部省は教育に軍国の精神を取り入れるようになった。

明治40年(1907)3月、八名郡下川第1尋常高等小学校と改称。

大正時代

大正7年(1918)、下川村長の加藤熊平は、本校に農業補習学校を併設。男女青年団の活動も盛んになった。

大正13年(1924)、八名郡下条尋常高等小学校と改称。

昭和時代

昭和4年(1929)、下条校奉安殿落成。

昭和7年(1932)、豊橋市立下条尋常高等小学校と校名変更。

昭和16年(1941)豊橋市立下条国民学校と校名変更。

昭和22年(1947)3月に教育基本法と学校教育法が制定、6・3制が実施された。これにより校名を「豊橋市立下条小学校」と変更。

(2)「下条小学校創立百周年」を

記念しての座談会より

昭和47年(1972)5月、下条小学校創立百周年記念の座談会が催された。ここでは、実際にこの下条で生活し、教育を受けてこられた多くの方々から、各時代の様子について、学校生活を中心とした日常生活の有様が語られた。その中からいくつかを紹介しよう。

明治16年(1883)～

明治25年(1892)生の方々の話から

下条小学校創立の前後

・最初に学校が出来たのは金西寺で、明治維新前後に創立された。当時は七ヶ所に寺子屋があり、下条というところが早くから教育に

対する関心の高い地域であったことがうかがわれる。

当時の学校生活と子どもの遊び

・ひとくちに言って、読み書きとそろばんが中心だった。

・当時は、義務教育とはいえ、学校へ行っても行かなくてもよかったので、同学年であっても年齢はまちまちだった。さらに、落第もよくあったようで、まったく学校に行かなかった人もいた。小学校4年、高等4年の計8年を満身に卒業するものは少なかった。兵隊検査の時に高等卒業は最上等で、あまりいなかったそうである。

・全国的に見ても、村の中流以上の家庭の子どもの大半は小学6年で辞めていた。貧しい家の子は、3～4年生で奉公に出されたりして、中学に上がる子は、村長か先生、あるいは大地主の息子くらいだった。ちょうど今の東南アジアの子どもたちの生活に似ていた。

・一年に何回も試験をやり、こんどは2年生の試験、こんどは3年生の試験といった具合で、合格すれば3年も飛び越えることが出来たようである。

・子どもの遊びは、テニス。高等科からは野球やピンポンなどがあつた。また、木登り、石蹴り、縄跳びなどもした。その他に、“おだま”といって、2cm角で厚み5mmの木札に書かれた絵や文字を合わせたり、地面に置いて片方をぶつける今のメンコ遊びのようなことをしていた。

・当時の運動会は、加茂河原で行われた。八名郡全体が集まって開催され、後に南部と北部に分かれて行われた。

・学芸会は、たいてい本を読むか、唱歌を歌うかで劇はなかった。女性では踊りをした人もいた。楽器は、オルガンが一台あるだけだった。

・遠足やお祭りの時の小遣いは、2銭くらいで、当時は1厘が最小単位。飴屋がきて、飴

を木に引っ掛けては伸ばし、ぐるぐると短い棒に巻いて1厘だった。おおよその様子がうかがえる。

当時の農村

・湿田で米作が中心、耕地整理後は米作の裏作として麦が作られた。養蚕も明治の後半より、盛んに行われるようになった。

当時の世相

- ・各家庭には時計はほとんどなかった。
- ・子どもたちの服装は、ほとんど紺半天で、教科書を風呂敷に包み、わら草履をはいていた。遠足の時はわらじに決まっていた。弁当に海苔はなく、中に梅干の入った焼きおにぎりに、たくあんでも持って行ければ上等であった。お菓子は、1銭でねじりん棒飴が6本買えた。
- ・教科書は、豊川堂書店が持ってきたものを購入した。筆記用具は、低学年は石板で、上級生になると鉛筆が使えた。習字は反古紙に真っ黒になるまで何度でも書いた。

明治26年（1893）～

明治35年（1902）生の方々の話から

学校の様子

- ・校舎も何回か建て替えられた。明治45年（1912）頃、高等科の授業は複式であった。先生もほとんどが代用教員で、師範学校を出た本当の先生は、校長と教頭の二人だけで、高等科は代用教員では教えられないために、ずっと複式であった。
- ・明治39年（1906）、高等科の生徒が増えて、小学校に収容しきれず、高等科1年の時、江楽寺の裏の元役場に一時移った。それから間もなく、小学校6年、高等科2年に変った。制度の切り替え時期にあたった人は、小学校4年で卒業式をやり、6年でまた卒業式を、そして高等科でもまたやった。八年間で卒業

式を三回経験した人もいたようであった。

- ・時には落第する人も多かった。厳しい先生も大勢いたが、その中でも、星野弥助先生は、下条の人々にとって忘れがたい方である。大正8年4月23日から昭和7年8月31日までの13年5ヶ月の間、本校において校長を務められた。優しい先生で、涙をこぼしながら生徒を叱る姿を見て、さすがの子どもたちも、心から頭を下げて反省していた。

学校の行き帰り

- ・部落ごとに通学団を作って登校し、道草が出来ないようにになっていた。家に帰ってからは、仕事が待っていた。女子は子守りで、男子は田畑の耕作の手伝いや桑の葉摘みなど。誰もが農家の作業はひと通りやったそうである。

夏休みの過ごし方

- ・豊川で朝から晩まで、素っ裸で泳いだ。五井・八反ヶ谷は行明川岸、天王・藤ヶ池は天王川岸、堀ノ内・竹ノ内は当古川岸とおおよそ決まっていた。

当時の遊び

- ・まりをついたり、お手玉をしたりした。ゴムまりはなかなか買ってもらえず、風船に糸を巻いて作った。お手玉も自分たちで、袋に豆を入れて縫い合わせて作った。

学校の運動会

- ・校庭が狭く、走れるほどの広さもなかったので、体育の授業で飛んだり走ったりする時は、行明の河原でやった。運動会は、三上の河原で行われたが、多米あたりの生徒は、三上河原へ来るだけで疲れてしまい、走る元気もなかったようだった。

授業の合図方法

- ・明治25年（1892）、佐羽尾光蔵氏が太鼓を寄贈してくれた。授業と昼休みには、それを叩いて合図としていた。その後、半鐘になり、さらに鈴へと変った。

当時の食べ物

・米の飯が食べたかったが、めったに食べさせてもらえるものではなかった。半麦（米と麦半々で炊いたご飯）でも上等だが、これもなかなか食べられなかった。粟、キビ、雑穀などを混ぜて炊いたものが主食であった。正月三ヶ日だけは、白い餅を食べさせてもらったが、米は無いわけではなく何十俵と積んであった。米を売って家計が成り立っていたからである。

学芸会

・学芸会に出演できる人は、成績がよほど良い人に限られていた。一度も出られなかった生徒も多くいたようである。今のような劇を演ずることはなく、主に読本の朗読であった。当時は、男女が並んで何かをすることはなかったし、運動場でも別々に遊んでいた。催しは、1年に3回あって、敬老会・父兄会・母子会で、それぞれ盛大に行われ、お祭り気分であった。この時には、みんなが出場することが出来た。

水泳訓練

・上級生が豊川で下級生を船に乗せ、青い色の淵まで出て、飛び込ませる。泳げても泳げなくても飛び込ませ、竹ざおを差し出して助け上げる。つかまれない者は流されてゆくので、上級生が飛び込み、船上に引き上げる。そして、「礼をいえ」、助けてやったから「ありがとう」と言えといわれる。少々矛盾したようなことであるが……。それでも、子どもたちは、3～5日で泳げるようになっていた。当時、下条の者が豊川で溺れることはなかった。

学校内の規律

・下級生は、上級生に対して絶対服従であった。夏休みになると復習組合というのがあり、お宮やお寺に集まって、上級生が先生になって指導し、夏休みの宿題などをみていた。そ

して、復習組合では遠足や運動会も行っていたが、自発的、自主運営ということでなく学校からの半命令だった。

先生の服装・給料

・校長と教頭が背広で、ほかの先生はつめ襟であった。給料は、校長が30円、教頭が24円、代用教員が一番安くて6円だった。当時、米一俵が3～4円であった。

霞堤と洪水

・下条は、霞堤防（鎧堤防）により、豊川の遊水地帯にされて何百年も苦しんできた。武家の住んだ吉田の町を洪水から守るために、上流の農民が犠牲にされたのである。霞堤防は、中国地方にもう一ヶ所あるだけという、日本でも珍しい築堤法といわれている。

・豊川が増水すると、天王の渡し（渡船）から学校へ連絡があり、朝登校してきた犬之子（現在の豊川市院之子町）の生徒たちは早く帰宅させられた。帰れなくなった先生は、お寺などに泊めてもらっていたようである。後に、青陵中学校へ通う下条の生徒たちは、豊川の洪水で暮川が通行不能になる前に下校させられて、他校区の生徒たちから羨ましがられていた。

明治36年（1903）～

明治45年（1912）生の方々の話から

子どもの遊び

・こま回し・凧揚げ・メンコ・カチン玉などで、テニスも楽しんでいた。野球はやらなかったようだ。剣道は盛んで、八名郡連合運動会というのがあって、3年連続優勝すれば優勝旗が授与された。下条は、2年連続優勝という記録を持っている。

出世した人々

- ・村上繁次氏（医学博士）
- ・村上恭平氏（理学博士）

・野尻 正氏 (サイゴン領事)

・森 伝氏 (哲学者)

校旗と校章

・校旗は、白い生地に“剛毅”と書かれた旗(第18連隊の佐藤鬼大佐が書いたもの)を校旗代わりにしていたが、後に、紫の生地に“下条”と書かれたものが使用された。

・校章は、校名の下川第一小学校の“下川”の二文字を組み合わせたデザインだった。



昭和2年の小学校

大正2年(1913)～

大正11年(1922)生の方々の話から

子どもの遊び

・男子は石蹴りや陣取り(ジャンケンをして、勝った方が、地面に手のひらで扇形を描き、陣地を広げてゆく遊び)、パンパン(メンコ)が主で、高学年になると庭球。女子はオジャミ、おはじきなどの遊びに興じた。

・遠足は鳳来寺とか田原の白谷鍾乳洞だった。鳳来寺へは、途中まで電車に乗り、あとは徒歩で行った。白谷へは、新設の渥美線を見ながら小池まで歩き、そこから電車に乗った。履物は、わらじから運動靴に変わる時であったが、わらじが一番楽だったので麻裏を履いていた。靴は履いても靴下がなく、足にマメが出来てしまった。

・大正10年(1921)、はじめて、女子の運動服を制服として着用した。白の天竺木綿のワンピースで、袖と首周りに紫色のモスで縁どりをし、バンドの代わりに紫色のモスで紐をくけて作った。

・修学旅行は、尋常科は伊勢で、高等科は奈良～京都であった。

以上は、「下条小学校創立百周年記念座談会」の記録より抜粋したことを書き添えておく。

第二次世界大戦前後

下条小学校の様子

・昭和19年(1944)、筆者(鈴木宗雄)が小学校に入学した頃は、戦争もかなり不利な状況下であり、生徒たちは毎朝お宮に集合、整列して通学団別に登校した。校門前には先生が立っていて、生徒は足並みをそろえて敬礼しながら校門をくぐった。奉安殿にお参りしてから教室に入った。

・毎日の授業は、太鼓で始まった。職員室前の廊下の壁には何十本もの木刀が掛けてあり、厳しさを感じたものである。剣道・銃剣術が盛んだったことが、幼心に残った。5～6年生がずいぶん大人に見えた。運動会では中庭で相撲も行われていたが、これは現代とは違うところである。

・昭和20年(1945)に入り、3月頃より毎日のように敵機の空襲を受けるようになった。子どもたちは、防空頭巾を肩に掛けて登校し、洋服の胸には、住所・氏名・血液型を書いた札が縫い付けられていた。校庭でも「敵機来襲」の合図で、指で両目・口・鼻を押さえて地面に伏せた。これは、爆弾が落下した時の振動で内臓が飛び出さないようにするための体勢であった。

・敵機の来襲があると「警戒警報」が発令され、急いで帰宅の途についたが、家に着く前

に飛行機の爆音が聞こえてきたりすると、いろいろな恐怖感に襲われたものだった。

- ・同年3月4日、B29の爆音が近づき、空気を裂くような落下音、続いて爆弾の炸裂音がした。竹之内の田んぼに落下したのだった。
- ・同年3月11日夜、名古屋空襲。
- ・同年5月19日昼、浜松方面空襲。
- ・同年6月19日夜、豊橋大空襲。豊橋市街から下地、大村、下条へと空爆が続き、八反ヶ谷地内の数ヶ所にも焼夷弾が落下し、慶増寺庫裏にも着火しかかったが、住職の懸命な消火活動により大事には至らなかった。空爆はここで止んだ。

戦時体制下の教育

・空襲で落ち着いた授業が出来ないため、一日中、手旗訓練、薙刀訓練、避難訓練などに力を入れていた日もあった。食料も不足していて、ヤナセ川原の開墾をして、ここの一町歩余りの畑に大麦、小麦、里芋、馬鈴薯、陸稲などを栽培した。また、農繁期には、4年生以上の生徒は農業動員され、それぞれの家の農業を手伝った。

戦争末期の校区の様子

・入営応召される方が多く、その都度軍歌を歌って、壮行会が行われた。子どもたちをはじめ下条校区の人々は、小学校に集まり小旗を振って、出征する方々を見送った。

・支那事変の勃発（昭和12年7月7日）から八年目に、「渥美半島に敵が上陸するかもしれない」とか「豊橋は戦闘地域になるだろう」などの話が広まった。その年の7月には、校長先生から「敵が上陸した際は、6年生以下の児童は校区の老幼婦女子と共に、北設の下川村へ避難する」との計画を聞かされた。

・同年8月15日、学校へ行くと今日の昼に重大な放送があるとのことであった。正午、天皇陛下より、和平の大詔があった。昭和20年（1945）、太平洋戦争の終戦である。

・同年8月16日、校長先生に続いて担任の先生からも、児童に「和平の大詔に沿い奉るように」との訓話と指導があった。

戦後の下条

・食糧が欠乏し、大豆飯、雑炊、甘藷（さつま芋）などでその日その日をしのぐ有様で、サトウキビを栽培し共同で搾り、砂糖をつかった事を覚えている。とにかく、食糧・物資が極度に不足していた。

・当時の子どもは、ほとんどがわら草履をはき、教科書をふろしきに包んで登校していた。給食制度が実施され、各自が持ち寄った野菜に魚の缶詰を入れて煮たものを、缶詰の空缶で作ったしゃもじですくってくれたことを覚えている。その味のおいしかったことやミカンのジュースをほんの少し分けてもらったことなど、今では、すべてが懐かしい思い出となってしまった。昭和26年から完全給食が始まった。

・物資不足の折から、学校ではわら細工をして、縄・びく・草履などを作った。正月には、学校でわら細工の作品展が催され、金・銀・赤の札をつけて優劣を競ったものでした。

・時の経過とともに、生活も徐々に落ち着いてきて、遊び道具のない子どもたちは、いろいろな工夫をして遊ぶようになった。今日では、考えられないことだが、ポケットに肥後造のナイフを入れて持ち歩き、木の枝や竹を削って、遊び道具を作った。コマでもよく遊んでいた。特に、上級生の間では野球が盛んで、町別対抗試合も行われていた。

・夏休みには、午後から学校に集まり、先生の引率で天王の渡船場へ泳ぎに行った。当時の豊川は、エメラルド・グリーンの綺麗な水を湛えて流れ、船頭さんが、この水を生活水にしていたほどである。学校から行かない日は、町別に集まって、当古、八反ヶ谷、行明のそれぞれの川原で泳いでいた。

・授業が終わった子どもたちは、帰宅してから一軒の家に集まり、1～6年生まで一緒になって遊んだ。その家に子どもの仕事（例えば、風呂の水を汲むこと）があれば、みんなで手伝ってから遊んだ。こうした中で、協力し合う精神や年長者が年少者の面倒をみる責任感などが自然に養われていったように思われる。貧しさが協力する心を育て、他の人を思いやり、互いに助け合う心を育てていったのである。

・戦後間もなく、下条小学校の先生であった故松井庄蔵氏による作詞・作曲の校歌が制定された。

--- 下条小学校校歌 ---

- 1 みのもり豊かなこの里に
受けしわれらが 身と心
みがきおさめん 時はいま
この学び舎に 光あれ
- 2 朝夕変わらぬ 本宮の
澄めるかたちぞ わが姿
ああ 凜として 励まなん
この 学び舎に 誉あれ
- 3 みなもと遠き 豊川の
清き流れの たゆみなく
かがやく文化 うちたてん
この 学び舎に 栄あれ

・校舎も時代とともに古くなり、近代的な鉄筋校舎へと改築されていった。また、豊川での遊泳も禁止されて、下条の子どもたちは水泳が出来なくなっていたが、昭和47年（1972）にプールが完成した。続いて同年に、体育館も完成。そして、昭和49年（1974）～同55年（1980）にかけて鉄筋校舎への改築および増築と、下条小学校は装いも新たになっていった。

・年々児童の少子化にともなって、生徒数も減少してきた。その反面、教育はゆきとどいた指導が出来て、下条の温かい人間関係のなかに、その能力を十分に発揮し実績をあげて

きたのである。昭和56年（1981）には「ソニー理科教育優良校」を受賞した。

・マンモス校では不可能な人間教育ができることが、下条小学校の良いところであり、保護者から校区の人々を含めた校区ぐるみの支援と協力が得られるすばらしい土地柄であることを強調したい。

・下条小学校の特色の第一は、年度初めに1～6年生を縦割りしたグループをつくり、各種行事に参加させ体験学習をさせていることであろう。先に述べたように、昔の子どもたちが、学年に関係なく上の者が下の者の面倒をみながら遊んだ時と同じことが、現在の学校行事の中で行われているのである。

・下条小学校独自の学校行事としては、学校田での田植え体験とその収穫およびおにぎり・五平餅の食事会、親子そば打ち会、マラソン大会と親子昼食会（PTA協賛）、天王の渡し跡公園の清掃活動、下条の歴史学習などがあげられる。

時代とともに教育の内容は変わっても、昔から変わらない地域の人々の温かい思いやりと協力によって、すばらしい人間教育がなされ、社会に役立つ人材を育成してきたことは、下条校区の誇りであろう。



昭和55年の小学校



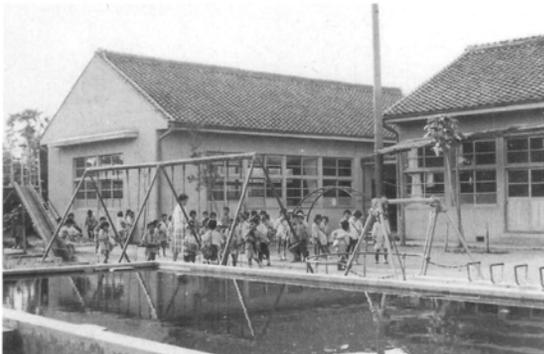
平成6年の小学校



昭和52年に建替えられた下条保育園

(3) 保育園のあゆみ

昭和29年9月、下条保育園が開設されたが、その後、時を経た平成3年4月1日付で「社会福祉法人・宝光福祉会下条保育園」として再出発した。開園当時の職員に、園長・高崎黙応、保母・山西春代、市川いち、高崎和子、河澄旦子、調理員・村松たき子の各氏の名前が記録されている。



開園当時の下条保育園

当時の敷地は356坪、建物は111.5坪で、現在の約半分程度であった。園児の定員は100名、昭和30年3月の第1回卒園児名簿（昭和23年生れ）をみると、41名が卒園している。平成16年の卒園児は18名で、半数以下となっている。

さて、開園から今日までの50年、保育園の運営形態は、時代の移り変わりと共に変わってきた。その変遷のすべてを述べたいが、それは保育園にある資料に譲ることにして、ここでは、園舎の変遷について記すことにする。

開園当初の園舎は、23年後の昭和52年に建て替えられ、鉄筋コンクリート二階建て、建坪169.7坪で新築された。昭和57年には、鉄筋コンクリート平屋建て、建坪54.5坪の遊戯室が完成している。敷地は、518.5坪（第2グラウンドと駐車場等を除く）。新築当時の園長は、高崎富彦氏。

築後三十年を経過した現在の下条保育園の園舎には73名の子ども達が通っている。園児数は、開園当時や昭和57、58年頃と比べると大幅な減少となるが、少子化が叫ばれている今日ではいたし方のない事であろう。保育士は8名と増えて、一人ひとりの目がすべての園児にゆきとどくようになった。このことも含めて、敷地の広さ、地域環境や豊かな自然は、下条保育園の特色になっていて、園児一人が受ける教育環境は、市内でも有数の恵まれた状態にあるといえる。このような環境のもと、一人ひとりの子が将来にわたってたくましく生き抜いていける基礎を育むための保育目標が掲げられている。その1は「創造とつくり出す力」、その2は「豊かな自然の中で育つ子どもたち」、その3は「まごころと思いやりの心」の三つで、運動会や発表会などの行事でも、この保育目標に沿って実施している。また、保育園を利用する人々の多様化にあわせて、生後6ヵ月からの乳児保育や平日午後7時頃までの延長保育など、多くの特別保育も実施している。

2 文化財・史跡・記念碑等

(1) 比売天神社の雨乞面

女面1面、祭礼用面4面があり、豊橋市指定、有形文化財に昭和42年2月17日に指定されている。制作年代、寄進の年月日は不明となっていますが、面の裏に文明3年(1471)2月17日和田郷と書かれている。霊験あらたかな雨乞面として信仰され、明治初年までは千ばつの時に下条7村(当時は現在の6町の村に暮川村が入っていた)の人たちは比売天神社におこもり参籠して雨乞いをしていた。

豊橋市指定有形文化財

比売天神社の雨乞面 5面
昭和42年2月17日指定

女面の裏面には墨書跡で「文明3辛卯年(1471)十二月十七日和田郷」とあります。これは、面の制作年が寄進の年月日かは判明しませんが、面の保存は比較的よく、深い味わいのある面です。

元禄7年(1694)3月付、下条郷之内村庄屋の記録「産神天王社雨乞祈念二付覽書之事」とある文書によると、霊験あらたかな雨乞の面として参籠され使用されてきたことが記録されています。これらの面は、仮面研究上において、非常に貴重な文化財といえます。

【面の名称】	【大きさ(cm)】
① 雨乞面(女面)	22.3×14.8
② 雨乞面	18.5×11.7
③ 雨乞面	24.0×16.0
④ 雨乞面	18.6×13.0
⑤ 雨乞面	20.5×12.7

① ② ③ ④ ⑤
雨乞面 豊橋市教育委員会

比売天神社の雨乞面

(2) 金西寺の麻地着色涅槃図

麻地着色の軸装で、豊橋市指定有形文化財に平成6年3月3日に指定されている。作者不明であるが狩野派の作で寛永3年(1626)以前の作と言われている。麻地着色の軸装は縦140cm横106cmで麻布3枚を継いで1枚の布に仕立ててある。



金西寺の麻地着色涅槃図

(3) 金西寺の千体仏(千体地藏尊)

室町時代の作と見られる千体仏で左手に宝珠、右手に錫杖を持った高さ22~23cmの千体地藏菩薩を中心に左右、両脇及び光背以外の場所に高さ6cmの立像が立錐の余地なく、並んでいる。同寺の麻地着色涅槃図よりも高く評価する関係者もいる程の千体仏である。



金西寺の千体仏

(4) 藤ヶ池町素盞鳴神社の神輿

藤ヶ池町の素盞鳴神社に豊川市の進雄神社から払い下げてもらったと言われ、文化財に匹敵する神輿1台がある。この神輿には寛文2年(1662)6月吉日に三州宝飯郡豊川郷(現、豊川市)総氏が奉献したと書かれている。作者名が書かれていないため豊橋市の指定文化財にはなっていませんが、豊川市に移されれば文化財に指定されると言われる神輿である。



藤ヶ池町素盞鳴神社の神輿

(5) 正楽寺の御所様

大宝2年(702)頃、第42代文武天皇が星野の郷(現、下条)の行在所の仮宮(竹之内町の中屋敷)で3年間住んでいて、その時に王子(皇子)が誕生し竹内王子といった。王子は病気の為若くして崩御された。御付の官女12人は王子の死を悲しみ、御所ヶ池に身を投げ若い命を果てた。

大子塚(王子の墓)は藤ヶ池の大師にあったが、戦国時代に竹之内村(現、竹之内町)正楽院(寺)に移された。王子のお墓を中心に12人の官女のお墓を里人たちが「御所様」と崇めて悲しく不遇に世を去った若い王子とけなげに散った12人の魂をしのんで、現代まで毎年1月20日に慰霊法要を続けている。竹之内村の(現、竹之内町)の名もこの竹内王子の名からついたと伝えられてきた。

*この墓は下条の豪族であった竹内右衛門太夫の墓と言われ、竹内氏の勢力を反映した説話と見られている。



正楽寺の御所様

(6) 牛川下川公園の忠魂碑

忠魂碑は明治10年(1877)の西南の役以降昭和20年(1945)の第二次世界大戦に至る間に戦死された殉職者(207名内下条は81名)の碑で牛川町の下川公園内(旧、下川村役場跡)に建っている。毎年10月に忠魂碑前で戦没者合同慰霊祭を行っている。

平成15年までは下条、牛川、鷹丘の3校区で行っていましたが、平成16年から下条、牛川の2校区で実施するようになった。

*現在の下条、牛川、鷹丘は豊橋市になる前までは旧下川村でした。



牛川下川公園の忠魂碑

(7) 天王の渡船(天王の渡し)

昔、豊川を渡る方法は浅いところを歩いて渡ったり、川に杭を打って厚板を乗せて、その上を歩いて渡っていたが、豊川の向こう側の森林の伐採や開墾のため、南北朝時代に星野勘左衛門行明が渡船を設置し昭和53年4月12日の廃船まで運行されていた。昭和の初め頃までは、天王部落の人達が順番に船をこいで、人や牛馬や荷物を渡していた。渡船の面影を伝える為、船の形を模した植え込みを現地に作り、「天王の渡し跡」の碑が建てられている。



天王の渡し跡

(8) 美田満眸の碑

昔の下条の土地は湿地帯で平坦ではなく、凸凹な土地で、洪水のたびに被害を受け収穫が得られない為、農家の人達は惨めな思いをしていた。このため神田川の悪水の氾濫改修、大江川の排水改修等を始めとする耕地整理を明治44年(1911)起工し、大正4年(1915)に竣工した。又大正11年(1922)に登記を完了した。

この結果、水の利用が円滑に行われ、満足する農作物の収穫が得られるようになった。この事業を記念して、見る限りの美しい田と表現した「美田満眸の碑」が藤ヶ池の素盞鳴神社の鳥居の右側に建てられた。



美田満眸の碑

(9) 恵沢存水の碑

下条の農家の人の畑は、小さな畑が各所に分散されており、又、道も曲がりくねった道で耕作するのに大変苦勞していた。

そこで、昭和39年(1964)12月15日から農業構造改善土地基盤整備事業(畑耕地整理)を開始し昭和41年(1966)3月31日竣工した。この事業により豊川用水を畑に導く事ができる様になった。

この結果、温室団地ができ下条の農業経営が近代化されたものに変化した。この事業を記念し、水道ポンプ場の東側に「恵沢存水の碑」が建てられた。



恵沢存水の碑

(10) 五井組報徳社

二宮尊徳(尊徳と改名する前は金次郎)の教え(農村を豊かにする為の教え)を実践する目的で、明治の初め頃から全国の各地で報徳社が作られる様になった。

本社を静岡県掛川市の大日本報徳社におき、平成13年現在全国に116の分社がある。

下条においては、五井組報徳社が松井亀四郎さんを中心に明治29年に作られ現在まで活発に活動を展開し、関係者の生活向上に大変役立ってきた。

(11) 校区内の神社と寺院の起源

校区内には下条村当時の状態で残っている神社が7社、寺院が7寺ある。その名前と起源は別表のとおりである。

校区内の神社と起源

町名	神社名	祭神	由緒	境内社
堀之内	12 級 社 ひめ 比売天神社 (旧、村社)	うずめ 鉦女命	元堀之内村及び竹之内村（現堀之内町及び竹之内町）の一部の氏神で、第42代文武天皇の御代（697～707）に創建、石巻神社の一末社と言いつたられた古社である。（一時期下条の総社） 棟札に延徳元年（1489）10月22日とある。 戦国から江戸時代には、牛頭天王宮社と言われていた。	秋葉神社 天白社
竹之内	12 級 社 八幡社 (旧、村社)	第15代 応神天皇	第100代後小松天皇（1392～1412）の応永年間、竹内右衛門太夫義鎮がこの地に来て住むことになった。 彼は、八幡社を深く崇敬していたので、この地に本社を建て武運の長久を祈った。 また、応永11年（1404）に大般若経600巻を手書きし、宝飯郡（現豊川市）財賀寺に奉納、内1巻を八幡社の社宝とした。	皇太神宮 秋葉神社 うめのみや 采宮社
竹之内 (白石)	15 級 社 八幡社 (旧、無格社)	第15代 応神天皇	棟札に寛文5年（1665）9月とある。 寛文年間、竹之内村の中村善太夫が、領主の勧めにより白石新田を開発し、竹之内八幡社の分霊を奉じて一社を建て、その加護を祈った。	皇太神宮 秋葉神社
藤ヶ池	12 級 社 素盞鳴神社 (旧、指定村社)	素盞鳴命 応神天王 受保神 金山比古神	棟札に天文17年（1548）9月23日とある。 （第105代後奈良天皇、足利11代将軍義輝の時代）	皇太神宮 津島神社 三峰神社 秋葉神社
五井	12 級 社 素盞鳴神社 (旧、指定村社)	素盞鳴尊	棟札に天文5年（1536）8月13日とある。 （第105代後奈良天皇、足利10代将軍義晴の時代）	皇太神宮 稲荷神社 水神社 産宮神社 秋葉神社

町名	神社名	祭神	由緒	境内社
八反ヶ谷	12級社 素盞鳴神社 (旧、指定村社)	素盞鳴尊 伊射波富尊 玉柱屋姫命	天正元年(1573)3月2日創建 (第106代正親町天皇、足利12代将軍義昭の時代)	八幡神社 天満宮社 稲荷神社 秋葉神社 金毘羅神社 津島社 祉水神社
天王	15級社 <small>いちきしま</small> 市杵嶋姫神社 (旧、無格社)	市杵嶋姫命	御神体は滋賀県琵琶湖の竹生島の竹生神社から御分身された神様で、和田村(現石巻本町)の弁天浦に弁財天社として鎮座していたものを元治元年(1864)9月15日に現在地に遷座された。 明治の一村一社の制度により廃止となり明治10年(1877)に市杵嶋神社と改名し安産の神となった。 御神体に延宝元年(1673)2月7日とある。	

校区内の寺院と起源

町名	寺院名	宗派	創建	開山・開基
堀之内	神宮山 靈江寺	曹洞宗	文明元年 (1469)	開山：妙巖寺3世笑岩義山 開基：鐵翁首座
堀之内	興久山 乘運寺	法華宗	文明11年 (1479)	開山：遠江鷺津本興寺 5世日蓮聖人 開基：中村賀門之助
竹之内	呑月山 正楽寺(院)	臨濟宗	慶長・元和の頃 (1596~1623)	開山：蒲濟和尚 開基：竹内右衛門太夫義鎮
藤ヶ池	宝光山 金西寺	曹洞宗	明応2年 (1493) *元和5年 (1619) 牛雪和尚により再興 し、妙巖寺末となる。	開山：妙巖寺12世 月吟牛雪和尚(再興時) 開基：華屋巖公座元
五井	祥雲山 瑞龍寺	臨濟宗	天正2年 (1574)	開山：空谷和尚 開基：高柳孫兵衛
八反ヶ谷	宝勝山 慶増寺	臨濟宗	応安2年 (1369)	開山：越宗和尚 開基：菅沼七郎左衛門 山本五左衛門
天王	龍心山 江楽寺	曹洞宗	永禄8年 (1565)	開山：龍心順虎首座 開基：村上三郎兵衛

3 人物・昔話

(1) 人物

星野勤左衛門行明 1350年頃

熱田大宮司家の出で、鎌倉時代末から、下条西町、大村、行明あたりを支配していた。小学校の南に今は畑であるが星野の地番あり星野城があったという言い伝えがある。その後、洪水で城が流され、豊川市行明に移り住み、天王の渡船・行明の渡船を開いた。その業績をたたえ、星野山行明寺が建てられる。

竹内右衛門太夫義鎮 1400年頃

藤ヶ池の大師に屋敷をかまえていたが、洪水で流され、竹之内に移り、以後100年の長きにわたって下条を支配していた強い一族であり、下条の中心的神社の造立をいくつか行った。このことにより、竹之内の地名は竹内氏をたたえ、つけられたと思われる。その後竹内氏の娘が中村氏に嫁ぎ、中村氏が支配することになる。その子孫は中村敏明さんかと思われる。

菅沼新八朗定盈^{さだみつ} 1550年頃

野田の戦い（三方が原の戦いの後、信玄が野田城を攻める）に破れた菅沼定盈が1574年に下条の堀之内に移り住み、徳川家康につく。五井の菅沼さんはその子孫である。

白井麦右衛門 1550年頃

今川氏支配の時は、下条を代官し、家康支配になった時は、大村、下地と広く代官し、大村に移り住み、村作りに専念し堀内山長松院、住吉山珠光院を建立、家康の関東転封にはついて行かず、帰農した。子孫は今も大村に多く住んでいる。

村上清兵衛 1660年頃

天王の村上義清さんのところには、緑色の鎧と系図が残っている。

村上氏の先祖は、信濃の国の葛尾城主村上義清で武田信玄と戦い破れ、八名郡の西郷弾

正をたよって落ちてきて、天王に移り住む。彼の資産と堀之内の住民とで、堀之内にため池を作り下条のために貢献した。そのため池の水利権は、天王の村上一族と堀之内住民に与えられたと聞き及ぶ。

高柳孫兵衛

五井の瑞龍寺の開祖といわれ、村作りの基礎を作ったと言われている。白井麦右兵衛は高柳氏の妹を妻にし、高柳氏の住居の裏に館を作ったと言われている。

鈴木玄仲 1840年頃

江戸時代後半の蘭方医で、江戸で吉田藩医利光仙庵に師事し、西洋医学を戸塚静海に学ぶ。1846年に帰郷し、下条藤ヶ池村に（小学校の東の鈴木家のあたり）開業する。当地方最初の種痘を実施する。

1863年再び江戸に行き、杉田玄瑞に西洋医学を学び、開拓使病院に勤める。

1875年に帰郷して、当古村に開業する。

荻野久作博士 1900年頃

オギノ式受胎調節法で世界的に著名な博士で、小学1年から高等4年を卒業するまで成績1番、中学に入っても1番、大学も1番を通したと言われている。

白石の中村彦作氏の次男で、後に西尾出身の荻野家へ養子に行かれた。当時は、あまり豊かでなく、兄妹も大勢いて、とても上の学校に進ませることは出来ない。畑仕事に連れて行くと、休みの合間に地面に字を書いている。その姿を見て、いかにもかわいそうに思った兄は、自分は何も食わずに久作を学校へやろうと決心した。これもひとえに兄の深い愛情であろう。

荻野博士が、下条出身であることを知る人は少ない。博士は、大学を卒業してすぐに新潟の竹山病院に勤められ、60数年新潟で生活されていたので、豊橋はもちろん下条でも知る人が少なかったと思われる。反面、新潟で

は地元出身と思われているようである。

先生は、明治15年（1882）3月25日生まれ、明治41年東京帝国大学医科大学を卒業。あの有名な荻野学説を発表されたのは、大正13年（1924）6月、42歳だった。これが学位論文で博士号を取られたわけだが、町医者であったために医学会をはじめ世間では大きな扱いはされなかった。もし、先生が教授として東京大学に残っておられ、この論文の発表をされておれば誰もが知る著名人となっていたことであろう。

現在、下条小学校の玄関に「徳不孤」と書かれた額が掲げられているが、荻野博士の書である。これは、乗運寺の故佐藤清賢住職が下条小学校創立百周年記念に際して、新潟市に在住されていた荻野博士にお会いしていただいたものだそうである。（「徳不孤」とは、論語に「徳不孤、必有隣」、*“徳は孤ならず、必ず隣あり”*とあり、徳のある者は孤立することがなく、理解し助力する人が必ず現れるという意味。）

【荻野博士の略歴】

明治30年高等科4年卒業、同年現時習館に入学、33年東京日本中学へ転校、35年同校卒業、同年一高入学、38年同高卒。同年東京帝大入学、42年卒。大正13年6月に論文「人類の黄体の研究」を提出、東京帝大より学位医学博士号を授与される。昭和4年8月より5年7月まで、ドイツ・オーストリア・イタリア・スイス・フランス・イギリス・アメリカ諸国を視察。昭和26年新潟市名誉市民に推選される。同30年荻野学説の功により保健文化賞、同年ブラジル産婦人科学会名誉会員、同年イタリアのナポリ市における第2回世界不妊学会名誉会長に推選される。33年紫綬褒章、同39年日本医師会最高優良賞、41年勲2等旭日重光章、45年国際不妊学会名誉会長、42年朝日文化賞、46年ブラジルのパスコタマ市名

誉市民となる。



荻野久作の書

(2) 昔話

藤ヶ池のお宮と春の大祭 藤ヶ池のお祭りは、赤鬼、黒鬼が出る。鬼達は町内に繰り出し、手に扇子で見物客の頭をたたく。たたかれた人は以後1年は無病で過ごすことができると言われている。子ども達は鬼に追いかけられ、逃げ回る。やがて鬼は境内に戻り、祭典が始まり、鬼も御祓いを受け、今度はお菓子をまく。拾おうとする見物客を菓子袋でたたいて回る。町内、境内で暴れ回る鬼達は、村中の厄災を祓い、福を授ける役を担っている。次に大きな獅子と御神輿も登場し、境内は最高潮に達し、お宮の田で作った餅米で餅を作り、投げ振る舞って終了となる。この大部分を青年が仕切る。ここで使われる御神輿は豊川の進雄神社からいただいたもので、江戸時代の大飢饉の折、藤ヶ池町内の氏子が豊川村にお米を寄付し、豊川村の氏子の飢えを救ったといわれ、そのお礼に御神輿が払い下げられ、持って帰る道中、豊川の洪水にあい、吉田経由で帰ろうとしたところ、暮川あたりでまた洪水に遭遇、道がわからなくなった時、大江川にかかる橋に鷺がとまっているのを見つけ、無事村に帰ることができたと言われる。その橋は今、鷺橋と銘々されている。



藤ヶ池の春の大祭

下条校区を中心とした歴史年表

時代(年代)		西 暦	日本・豊橋周辺の出来事 (○) (・)	下条校区とその周辺の出来事	
原 始	先 土 器 時 代		100000B.C.	・牛川原人(豊橋) ・牛川原人(初の古人類)	
	縄 文 時 代	草創期	10000B.C.	<採集経済> ○原始共同生活 (狩猟、漁労) ○石器 ○縄文土器	・嵩山蛇穴遺跡
		早期	7000B.C.		
		前期	5000B.C.		・石塚貝塚 ・菟足神社貝塚
		中期	3000B.C.		・麻生田遺跡
		後期	2000B.C.		・大蚊里貝塚 ・五貫森貝塚
		晩期	1000B.C.		*まだ下条地域では、縄文時代の遺物、遺跡は発見されていない。
	弥 生 時 代	前期	300B.C.	<農業経済> ○稲作始まる ○氏族神崇拜 ○金石併用 ○弥生式土器	・玉川変電所遺跡 ・白石遺跡(遠賀川式土器出土)
		中期	B.C.= A.D.		・高井遺跡(住居跡、方形周溝墓) ・瓜郷遺跡
		後期	A.D.200		・堀之内、竹之内集落始まる ・大師、八反ヶ谷集落始まる
	古 墳 時 代	前期	A.D.300	<統一国家> ○古墳築造 ○産業発達 ○農耕神崇拜 ○土師器 ○須恵器	・浪の上遺跡(豊橋地方最古の古墳)
		中期	A.D.400		・谷口古墳
		後期	A.D.500		・大師古墳
	古 代 (奈 良 時 代)	大 宝	元年	701年	○大宝律令施行 ○貴族文化始まる ○条里制度始まる ・三河の国(西三河)と穂の国が一つの国となり、三河の国が出来る。 ・下条地域は八名郡和田郷に属す
		和 銅	3年	710年	○都を奈良に移す

*・B.C.:西暦前でキリスト誕生以前を意味する(B.C.と書くのが一般的)
 ・A.D.:西暦紀元でキリストが誕生した年を1年とする(A.D.と書く)
 ・古代(奈良・平安時代)以降についてはA.D.の記載を省略

時代(年代)		西 曆	日本・豊橋周辺の出来事 (○) (・)	下条校区とその周辺の出来事	
古代 (平安時代)	延暦	13年	794年	○都を京都に移す	
	延喜	2年	902年	○条里制度廃絶	
	延長	5年	927年		・「延喜式」に記載された26神社に八名郡では石巻神社のみが記載
中世 (鎌倉時代)	文治	元年	1185年	○守護と地頭の設置	
	建久	3年	1192年	○源頼朝征夷大將軍となる。	
	承久	3年	1221年	○承久の乱	
中世 (南北朝時代)	暦応	元年	1338年	○足利尊氏征夷大將軍となる。	
	延文	5年	1360年	・矢作事件(三河守護に係る争い)	・矢作の事件で星野勘左衛門行明守護代西郷氏を破る。
	応永	11年	1404年		・八名郡下畳(条)村、竹内右衛門太夫義鎮寄付(宝飯郡財賀村財賀寺大般若経奥書)
中世 (戦国時代)	応仁	元年	1467年	○応仁の乱 (戦国時代始まる)	
	文明	2年	1470年		・石巻神社織女帳之事 大織女下条、小織女高井 以後、幾度も大織女を努める。
	延徳	元年	1489年		・下条の竹内氏、この年から天正14年(1586)までの約100年間で比売天神社を造立し、上ぶきし、鳥居を造立(創建は697~707年)
	明応	2年	1493年	・戸田宗光、田原から二連木城へ移る。 (戸田氏、渥美半島全域を支配) ・牧野古白、牛久保城主となる。	
	永正	2年	1505年	・牧野古白、今橋城を築く。	・下条、吉田領となる。
	永正	3年	1506年	・今川氏親が今橋城を攻め、牧野古白討死	

時代 (年代)		西 暦	日本・豊橋周辺の出来事 (○) (・)	下条校区とその周辺の出来事
中世 (戦国時代)	大永 2年	1522年	・牧野古白の子、牧野信成が今橋城を吉田城と改める。	
	天文 6年	1537年	・戸田康光、吉田城を攻略 (牧野家の本家滅亡)	
	天文 15年	1546年	・今川義元、吉田城を落とす。	・大洪水、下条被害甚大
	天文 16年	1547年	・今川義元、田原城攻略 (戸田氏の本家滅亡)	・以降、東三河は桶狭間で今川義元が死ぬまで、今川氏の支配下となる。
	永禄 3年	1560年	○桶狭間の戦い (織田信長が今川義元を倒す)	
	永禄 7年	1564年	・徳川家康、吉田城を攻略し、酒井忠次城主となる。	
	元亀 3年	1572年	○三方原の戦い	
中世 (安土・桃山時代)	(元亀) 4年 天正 元年	1573年	○野田の戦い (武田信玄病死) ○室町幕府滅亡する	・菅沼新八朗定盈 ^{きだみつ} 、天正元年より2年まで下条に居住 (その後、野田城を回復する)
	天正 3年	1575年	○長篠の戦い	・野田城、長篠の戦いの全線基地となる。
	天正 18年	1590年	○秀吉天下統一 家康関東転封 ・池田輝正 吉田城主となる。 (15万2千石)	・八名郡、吉田城主・池田輝政の領地となる。
	慶長 5年	1600年	○関ヶ原の役 ・池田輝政吉田から、播州姫路へ移る。(52万1300石)	
近世 (江戸時代)	慶長 8年	1603年	○徳川家康征夷大將軍となる。	
	慶長 19年	1614年	○11月大阪冬の陣	
	元和 元年	1615年	○5月大阪夏の陣 (豊臣氏滅亡)	
	延宝 8年	1680年		・8月6日、8月14日大暴風雨・大洪水 (収穫皆無)

時代(年代)		西 暦	日本・豊橋周辺の出来事 (○) (・)	下条校区とその周辺の出来事
近世 (江戸時代)	正徳 4年	1714年		・ 7月9日大暴風雨・大洪水(収穫皆無)
	嘉永 元年	1848年	・ 羽田野敬雄 羽田文庫創設	
	嘉永 2年	1849年		・ 蘭方医鈴木玄仲、藤ヶ池村に開業し、当地方 最初の種痘を実施 * 文久3年(1863)江戸に出る。
	慶応 3年	1867年	○薩長連合なる。 ○明治天王 ^{せんそ} 踐祚 ○徳川慶喜大成奉還	
近代 (明治時代)	明治 元年	1868年	○明治維新(官制改革)	
	明治 2年	1869年	○吉田藩を豊橋藩と改称	
	明治 3年	1870年		・ 8月大暴風雨・家屋倒壊多数
	明治 4年	1871年	○廃藩置県 ○神仏分離令	・ 11月廃藩置県により額田県となる。
	明治 5年	1872年	○学制発令	・ 11月藤ヶ池郷学校設立 ・ 11月額田県より愛知県となる。
	明治 6年	1873年	○徴兵令がでる。	・ 1月郷学校を義校と改める。 ・ 10月第2大学区内愛知県管下第9中学区内 第41番小学下条学校と改称
	明治 7年	1874年	○全国戸籍成る。	
	明治 8年	1875年	○平民、苗字を帯せしむ	・ 小学校、藤ヶ池今西寺より天王江楽寺へ移る。
	明治 9年	1876年		・ 蘭方医鈴木玄仲、当古村と豊橋の本町に種痘 所を設置 * 浅井弁安と大沢玄龍と共に吉田3名医と言 われた。
	明治 10年	1877年	○西南の役	・ 9月第2大学区内愛知県下第9番中学区内第 77, 78番小学下条学校と改称
	明治 11年	1878年		・ 堀之内、竹之内、藤ヶ池、白石新田が合併し て東下条村に、天王、五井、八反ヶ谷、暮川 が合併して西下条村になる。(合併願いは明治9年に提出)
	明治 12年	1879年		・ 10月愛知県八名郡第31番小学下条学校と改称 ・ 村上清兵衛、深井九郎三郎県会議員となる。

時代(年代)		西 暦	日本・豊橋周辺の出来事 (○) (・)	下条校区とその周辺の出来事
近 代 (明 治 時 代)	明治	15年	1882年	・ 3月25日世界的大医学者、荻野久作が白石、中村彦作の二男として生まれる。
	明治	16年	1883年	・ 2月愛知県八名郡第28番学区公立小学下条学校と改称 ・ 天王消防組創設
	明治	20年	1887年	・ 3月愛知県八名郡尋常小学西下条学校と改称
	明治	21年	1888年	○東海道線開通 ・ 豊橋駅開業
	明治	22年	1889年	○大日本帝国憲法発布 ・ 牟呂用水創設 ・ 10月町村制が実施され、東下条村、西下条村に犬之子村を合わせ、下条村となる。 ・ 中村猪三郎、下条村長
	明治	23年	1890年	○府県制郡制公布 ○教育勅語 ・ 養蚕業を本業とする農家が増加
	明治	24年	1891年	○10月濃尾大地震
	明治	25年	1892年	・ 4月小学校、東下条西浦(現在地)に移転 ・ 7月下条村立下条尋常高等小学校と改称
	明治	26年	1893年	・ 中村猪三郎、下条村長
	明治	27年	1894年	○日清戦争始まる。 ・ 野尻定蔵、下条村長
	明治	28年	1895年	○日清戦争終わる。
	明治	29年	1896年	・ 五井組報徳社設立
	明治	31年	1898年	・ 9月6日大暴風雨、豊川増水し、堤防数箇所決壊 [鐘ヶ淵決壊]
	明治	32年	1899年	・ 村上敬八、下条村長
	明治	33年	1900年	・ 加藤熊平、下条村長
	明治	35年	1902年	・ 野尻定蔵、下条村長
	明治	37年	1904年	○日露戦争始まる。 ・ 中村猪三郎、下条村長 ・ 7月10日豊川大洪水で被害甚大、堤防も2箇所被害
	明治	38年	1905年	○日露戦争終わる。
明治	39年	1906年	・ 豊橋市制を施行 ・ 9月下条村と牛川村が合併して下川村となる。 ・ 中村猪三郎、初代下川村長	

時代 (年代)		西 暦	日本・豊橋周辺の出来事 (○) (・)	下条校区とその周辺の出来事
近代 (明治時代)	明治	40年	1907年	・ 3月八名郡下川第一尋常高等小学校と改称
	明治	41年	1908年	・ 第15師団設置 ・ 加藤熊平、下川村長
	明治	42年	1909年	・ 荻野久作、東京帝国大学医科大学卒業 ・ 8月大暴風雨、豊川増水（瑞龍寺の大銀杏倒れる下条仮設役場倒壊） 家屋倒壊7～8戸
	明治	43年	1910年	・ 6月下川村、石巻村総合耕地整理組合設立
	明治	44年	1911年	・ 1月下川村、石巻村総合耕地整理起工
近代 (大正時代)	(明治)大正	(45年)元年	1912年	○明治天皇崩御 ・ 中村猪三郎、下川村長
	大正	3年	1914年	・ 下条青年団及び婦人会結成 ・ 西下条耕地整理組合設立許可
	大正	4年	1915年	○第一次世界大戦始まる。 ・ 女子青年団結成 ・ 下川村、石巻村総合耕地整理竣工
	大正	5年	1916年	・ 7月本坂トンネル開通 ・ 下川村教育会創設 ・ 下川村戸主会創設
	大正	6年	1917年	○ロシア革命
	大正	7年	1918年	・ 下条農業補習学校併置 ・ 米騒動豊橋にも波及 ・ 西下条耕地整理着工 ・ 加藤熊平、下川村長
	大正	8年	1919年	・ 下条に電燈がつく
	大正	11年	1922年	・ 岡田安蔵、下川村長
	大正	12年	1923年	○関東大震災 ・ 渥美線開通 ・ 2月下川仏教会発会 ・ 3月公設西下条消防組天王部設置 10月に下川消防組と改称
	大正	13年	1924年	○普通選挙法公布 ・ 4月愛知県八名郡下条尋常高等小学校と改称 ・ 荻野久作論文を提出し、東京帝国大学より医学博士の学位を贈られる。
	大正	14年	1925年	・ 矢野宗治、下川村長
昭和	(大正)昭和	(15年)元年	1926年	○大正天皇崩御
	昭和	2年	1927年	・ 矢野宗治、下川村長 ・ 7月18日下条取水場工事着工

時代 (年代)		西 暦	日本・豊橋周辺の出来事 (○) (・)	下条校区とその周辺の出来事	
近 代 (昭 和 時 代)	昭和	5年	1930年	○昭和恐慌	・ 5月3日忠魂碑が下川役場に建設 ・ 3月29日条取水場工事完工・送水開始
	昭和	6年	1931年	○満州事変勃発	・ 矢野宗治、下川村長 (三選)
	昭和	7年	1932年	○満州国誕生 ○犬養首相暗殺 (5. 15事件)	・ 8月15日下川村豊橋市に合併し、豊橋市となる。 ・ 豊橋市立下条尋常高等小学校と改称
	昭和	10年	1935年	・ 当古橋開通	・ 8月28日～29日大暴風雨豊川大洪水 稲作皆無
	昭和	11年	1936年	○高橋是清等暗殺 (2. 26事件)	・ 中村寿一 (竹之内出身) 拳母署長を経て県会 議員に当選 (二期当選) ・ 補習学校廃止
	昭和	12年	1937年	○日中戦争起こる。	
	昭和	13年	1938年	○国家総動員法制定	
	昭和	14年	1939年	○独軍、仏国境突破、 第二次大戦起こる。	・ 下条産業組合設立
	昭和	15年	1940年	○日独伊三国同盟	
	昭和	16年	1941年	○第二次世界大戦 (太 平洋戦争) に突入	・ 豊橋市立下条国民学校と改称
	昭和	17年	1942年	○食料管理法施行	・ 下条産業組合、豊橋市農業会に統合し、下条 支所となる。
	昭和	19年	1944年	・ 12月7日東南海地震	・ 下条水利組合設立 (豊川より電気揚水)
昭和	20年	1945年	・ 1月13日三河地震 ・ 6月19日豊橋大空襲 ○8月6日広島原爆投下 ・ 8月7日豊川海軍 工廠爆撃 ○8月9日長崎原爆投下 ○ポツダム宣言受諾 (8月15日に終戦)	・ 8月7日下条盲爆	
昭和	21年	1946年	○11月3日新憲法公布 ○婦人参政権	・ 8月下条校区の創立 初代総代会長：白井忠次	

時代 (年代)		西 暦	日本・豊橋周辺の出来事 (○) (・)	下条校区とその周辺の出来事	
近 代 (昭 和 時 代)	昭和	22年	1947年	○教育基本法、学校教育 法制定 (6・3・3・4制実施) ○新生中学誕生	・豊橋市立下条小学校と改称(校歌制定) ・4月豊橋市立北部第2中学校誕生 ・白井忠次市会議員当選
	昭和	23年	1948年		・9月北部中学と東部中学が合併し、青陵 中学校となる ・農業協同組合法制定により、5支所を統 合して、東部農業協同組合となる。
	昭和	26年	1951年	○対日講和条約調印	・荻野久作博士、新潟市名誉市民に選ばれる。
	昭和	28年	1953年	○9月15日13号台風 ○テレビ放送開始	・13号台風の被害甚大
	昭和	29年	1954年	・豊橋産業文化大博覧会 開催	・下条保育園設立
	昭和	30年	1955年		・中村寿一、拳母市長に当選
	昭和	32年	1957年		・1月7日下条地区簡易水道工事着工 ・3月31日同上工事完工、4月1日より通水開始
	昭和	33年	1958年	・宇連ダム完成	・荻野博士、紫綬褒賞受賞
	昭和	34年	1959年	○9月26日伊勢湾台風	・伊勢湾台風の被害甚大
	昭和	35年	1960年	○日米安保条約締結	
	昭和	38年	1963年	・東三河工業整備特別 地域指定 ○豊川放水路完成	
	昭和	39年	1964年	○東京オリンピック開催 ○東海道新幹線開通	・下条協業温室組合発足 ・豊橋構造改善土地基盤整備事業開始
	昭和	41年	1966年		・豊橋構造改善土地基盤整備事業竣工
	昭和	43年	1968年	・豊川用水事業完成	・下条青年団解散 ・下条地区簡易水道市上水道に吸収合併
	昭和	44年	1969年	○東名高速道路開通	・8月5日豊川戦後最大の大洪水
	昭和	45年	1970年	○日本万国博開催(大阪)	
	昭和	46年	1971年		・井口一市会議員当選
昭和	47年	1972年	○5月15日沖繩返還 ○札幌冬季オリンピック 開催	・11月3日下条小学校百周年記念式典 ・7月下条小学校プール竣工	

時代(年代)		西 暦	日本・豊橋周辺の出来事 (○) (・)	下条校区とその周辺の出来事
昭和	49年	1974年	・豊橋港開港	
	50年	1975年		・井口一市議員当選(二期目)
	52年	1977年		・下条第二給水所(現下条給水所)工事着工
	53年	1978年		・下条橋完成
	54年	1979年		・井口一市議員当選(三期目) ・下条第二給水所(現下条給水所)工事完工、給水開始
	55年	1980年	・豊橋資源化センター開設	・5月2日下条校区市民館運用開始
現 代	(昭和)平成 (64年)元年	1989年	○昭和天皇崩御	
	平成 7年	1995年		・農業集落排水事業完成 平成3年度から施工し、平成7年12月から供用開始
	平成 9年	1997年	・5農協合併により 豊橋農業協同組合発足	・青陵中学校創立50周年
	平成 12年	2000年	○東海豪雨	・9月12日東海豪雨により豊川大洪水
	平成 14年	2002年		・消防下条分団第二方面隊操法大会で優勝
	平成 15年	2003年		・8月9日台風10号により豊川大洪水 平成で1番の洪水で昭和44年8月5日にせまるもの ・8月17日R Y O Zスポーツクラブ設立 ・消防下条分団第二方面隊操法大会で優勝
	平成 17年	2005年		・消防下条分団第二方面隊操法大会で優勝
	平成 18年	2006年		・消防下条分団第二方面隊操法大会で優勝 ・消防下条分団市操法大会で優勝(県大会出場) 分団長 柳田 裕吾 指揮者 白木 貴雄 一番員 高柳 誠司 二番員 中村 佳雅 三番員 中村 允克 補助員 中岡 照博



- ①、簡易水道取水場 P21
- ②、村上清兵衛屋敷跡と鎧 P39
- ③、市杵島姫社 P37
- ④、天王のわたし P12、34 (7)
- ⑤、素盞鳴神社 (八反ヶ谷) P37
- ⑥、五井組報徳社 P35 (10)
- ⑦、素盞鳴神社 (五井) P36
- ⑧、市水道取水場 P21
- ⑨、下条霞堤 (暮川地区内) P13
- ⑩、集落排水処理場 P49
- ⑪、星野城跡地 P12、39
- ⑫、市民館 P22 (2)



- A、素蓋鳴神社（藤ヶ池） P33、36、40
- B、大江川 P9
- C、白石遺跡 P10
- D、荻野久作博士生家 P39、45
- E、比売天神社（堀之内）、雨乞面 P11、33（1）、36
- F、八幡社（竹之内） P36
- G、正楽寺の御所様 P34（5）
- H、温室団地 P19
- I、竹内氏子孫宅 P12
- J、金西寺、涅槃図、千体仏、保育園 P32、33、38
- K、下条城跡地

参 考 文 献

下条誌のためにあれこれ (村上逸郎)	郷土豊橋を築いた先覚者たち
下條誌	豊橋の史跡と文化財
八名郡誌	東三河の歴史
八名郡下川村・村誌	豊橋市寺院誌
下条の昔話	豊橋市神社誌
創立百年の歩み (下条小学校)	豊橋市水道五十年史

編 集 後 記

私たちは、平成16年9月に立ち上げた校区史編集準備委員会を経て、平成17年3月に校区史編集委員に選出され、以降平成18年6月まで毎月欠かさず編集会議を開いてきました。

校区の文化財や史跡等について貧しい知識しか持ち合わせていませんでしたが、地元で郷土下条の歴史を探究している方から貴重な資料提供を受け、また、種々の文献にあたると共に、関係者の方々からいろいろご教示を得てまとめる事ができました。この本により下条校区を理解し、下条の歴史に関心をもっていただければ編集員一同大変うれしく思います。

終わりに、貴重な時間をさいて毎回会議に出席し、支援を頂いたサポーターの柿田利弘さんと市川雅祥さん並びに個人の貴重な資料を提供していただいた村上逸郎さんに厚くお礼を申し上げる次第です。

下条校区史編集実行委員

編集委員

富田 吉男	中村 功	松井 春雄	鈴木 宗雄	山本 康男
松井 和久	小野田幹男	宮島 武良	赤堀 光信	守田 友直

市職員編集サポーター

柿田 利弘	市川 雅祥
-------	-------

校区のあゆみ 下条

平成18年12月25日発行
編 集 下条校区総代会
下条校区史編集委員会
発 行 豊橋市総代会
印 刷 株式会社 きょうせい

R2100

古紙配合率100%再生紙を使用しています





2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyokashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋